
犯罪者は英雄？

天川 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯罪者は英雄？

【Nコード】

N4280X

【作者名】

天川 流

【あらすじ】

かつて英雄なんて呼ばれた俺、華瀬悠希はなせ ゆうきは犯罪者となってしまうた。俺は何もしていない。かつての友人の助けによって俺は学園都市まで逃げ延び、なんと転入までさせてくれた。これは英雄から犯罪者まで成り下がってしまった一人の少年の物語。

prologue (前書き)

みなさん初めまして。天川流です。
まったくの素人ですすみません。

何かと不具合があるかと思っています。下手だと思しますので、ご指導
ご鞭撻お願いいたします。

prologue

「ハアハア・・・」

夜の街の人混みを押しのけながら俺は走り続ける。

「おいっ！早く探し出せっ！！絶対に逃がすなよっ！！」

街の喧騒の中に埋もれた男の怒声、ぶつかった女性の悲鳴、文句を叫ぶ若者の声。それらから逃げるように俺は走り続ける。

何故こんなことになった？

何度目かの疑問が俺の思考をよぎる。が、そんなことは分かり切っている。

嵌められたのだ。

では誰に？

そんなの俺が知りたい。

思いながらも足は止めない。止めようものなら首を落とされてあの世行きだろう。こんなところで死ぬわけにはいかない。

『そこを右に曲がって！』

頭に女性の声が響く。いつもは落ち着いた声音なのだが今は焦りが滲み出ている。その声に従ってビルの角を右に曲がる。その先に微かに見えるユラユラ揺らめく光の柱を確認して内心で安堵する。

「一葉っ！！あれか！？」

『聞いてる暇があるなら足を動かさない!!』

そう言いながらも彼女の声が先ほどよりも少しばかりホッとして
いるように思えるのは気のせいではあるまい。ならば――。

「あれがゲートっ!!」

走る速度が自然と速まる。

『セキュリティにかからないようにしたからそのまま正面から入
って』

「いいのかよ!? 問題になるぞ!？」

『いいわよ。理事長だもの』

「思いつきり職権乱用じゃねーか!!」

つついっつついッコミを入れてしまった。けどまあ後で礼言わねーと
な。

「――っ!!!!」

思考に余裕が出てきたとき、背中に多数の殺気を感じた。本能に
従って真横に飛ぶ。

ドブウワァー!!

俺が居た場所に突如火柱が上がる。

あ、あぶねー。あのままだったら丸焦げ……。いや、あれぐ
らいなら大丈夫か。

「しっつっつこいんだよ!!!!!!」

叫び、敵の姿を確認しようともせず光の柱へと突っ走る。

(あと200・・・150・・・)

心の中で呟きながら走る。その間も敵の攻撃は止まない。それを全て交わしながら目測で数える。

(100・・・50・・・)

「おいっ！！誰か止めろっ

！！」

もうゲートがはつきりと見える位置まで近づき、後ろから焦りの声が聞こえてくる。

(30・・・15・・・5っ！！！)

五メートルを切った時点で俺は地面を蹴って飛び込む。

「転移っ！学園都市スフィアっ！！」

叫ぶと俺の体は白い光に包まれる。怒声や罵倒が後ろから聞こえてくるが、もう手出しできないはずだ。

今度こそ安堵のため息を吐く。光の量は徐々に増していき、俺はその場から消えた。

episode 1 堕ちた英雄

魔術師、死霊術師、召還術師、精霊術師、超能力者。

能力者と呼ばれる彼らが世界を発展へ導き、これらは世間の常識となっていた。

能力者は生まれながらにして一般人とは違う時間軸で生きている、そんなことを思っている者も少なくないだろう。

そんな彼らの“力”は当然軍事力としても使われる。

前世紀の兵器は能力者の軍隊には遠く及ばない。それ程に協力な物であり、国家が彼らを優遇するのは必然であった。

だが、彼らも人間だ。悪意を持って力を使わないとは限らない。

それは国際会議でも危ぶまれたことだ。

能力者をきちんと育成し、危険な思想を抱かせないようにする。

それがこの世界の課題となった。

そんなときに発案されたのが人口島“学園都市スフィア”の建設である。

各国が予算を出し合い、能力者を同じ場所で教育し、国が干渉できない場所。

すぐに国際会議で決定され、人口島の建設が進められた。なんと太平洋のど真ん中に。

飛行機で行かなければならないような場所であるが、それらを簡略化させる装置も当然作られた。

ゲート——正式名称『時空間転移魔法装置』。国の干渉ができないようにするため学園都市が許可した者のみをワープさせる夢アイ

テム。

各国が膨大な資金を投資したこれらは、ある人物の活躍により発案から僅か八年で完成された。

小、中、高、大学までの生徒数は約40万人。縦横およそ200キロメートルと広大な面積であり、もう一つの国と言っても過言ではない。

俺はそんな学園都市へとゲートにより一瞬で到着した。

「よつと」

ワープしてきた俺は初めの一步を踏み出す。

眼前にはヨーロッパや、日本風などの様々な建築物が広がっていた。初めてきた学園都市としては「綺麗なところ」といった感想だ。
「・・・疲れた」

そこで自分が先程まで走り回っていたことに気づいた。今更になって汗が滴り、呼吸が乱れる。

深呼吸。

肺の隅々まで酸素を行き渡らせるように何度も息を吸っては吐いていく。

「はぁー・・・しつかしなんというか・・・」

子供ばっかだな。

そう言おうとしたが、自分も16なので口にはしない。

だがそう思うのも当然で、見渡す限り少年少女しか見当たらない。さすがに店とかには大人もいるらしいが、7時半の帰宅ラッシュのこの時間に子供だけってのはなんだか変な感じだな。

トゥルルル。

そんなことを思っていると、ポケットの中に突っ込んでいた携帯が鳴る。通話ボタンを押して耳にあてる。

「・・・もしもし」

『もしもし？悠希？』

電話越しに俺を呼ぶ落ち着いた声。

「一葉か。わざわざケータイにかけずに念話でよかったのに」

『私はあんたより魔力無いから疲れるのよ』

首を竦めた気配が伝わってくる。念話とは、互いの思考を魔力で飛ばして会話する魔法だ。先程一葉の声が頭に響いてきたのはこの魔法のためである。

「まあいいや。で、俺はどこに行けばいい？」

『そうね、そこから一番高いビルが見えない？』

言われて辺りを見回す。すると一葉の言った通り一際大きい建物が目についた。

「ああ、見える」

『その最上階に来て。警備には私から言っとくから』

「ん、了解」

電話を切り、再びポケットに突っ込んでビルに向かって歩き出した。

ビルにたどり着くと警備員に声をかけられたがすんなり通してくれた。

エレベーターに乗り込み16階、最上階のボタンを押す。微かな浮遊感に包まれ、上昇していく。最上階へ到着し、真っ直ぐに伸び

る廊下をスタスタ歩く。

すぐに奥の扉の前に辿り着く。軽く深呼吸してドアをノックすると「どうぞ」と促されノブを回す。

「久し振りね悠希。それとも英雄、はなせ ゆっき華瀬悠希様のほうがいいかしら？」

「黙れ腹黒女。その英雄つてのやめろ」

ニコニコ軽口を言ってくる腹黒女ことなみかぜ かずは波風一葉。

俺より10歳は年上のはずなのだが、どうみても2つ上にしか見えない容姿は俺の暴言にも眉一つ動かさずに笑顔を振りまく。

「あらあら、せっかく困つてるところを助けてあげたのに」

「それに関しては素直に感謝してる。でもそれだけはやめろ」

軽く睨むと一葉は大袈裟に肩をすくめる長い黒髪がサラサラとなびく。普通ならばこの仕草だけでもバカな男が惚れるのではないかと思わせるほどのものだ。

「まああんたには五年前に紅葉を助けて貰ったから別にいいんだけどね」

「気にしなくていいのにな」

今度は俺が肩を竦める。

「まあその話はまた今度にしましょう。じゃあ本題に入るけど・・・」

「そこで言葉を区切る。続けられた問いは半ば予想していたものだった。」

「・・・何があつたの？」

こちらを窺うように上目遣いに聞いてくる一葉に俺は目を瞑った。数十秒の沈黙の後、口を開く。

「・・・俺がロシアからの大使たち14名を暗殺したんだと」

苦笑しながら言うと、ポカンとしてフリーズ。俺が言葉を理解したのか顔面蒼白になりながらおずおず聞いてくる。

「そ、それって何かの間違いでしょ？なんで悠希がそんなこと・・・」

」

最後ぐらいから消え入りそうな声になり、表情が沈んでいくのが目に見えてわかった。

「もちろん俺はなにもしてないけど、大方俺がまだ五年前のことを恨んでるでも思ってるんだろ。それか日本が俺を危険だと判断して殺そうとしたとか」

「……」

自嘲気味に言う。と再びの沈黙。実際こればかりは言い返せないだろう。確かに俺は今でもあいつらを許せないし、何度も発狂しそうにもなった。そのたびに身を切るほどの憎悪を耐えて今まですごしてきたのだ。だがそんなこと言っても信じて貰えないのはわかりきっていることだ。

（さて、これからどこに行こうか）

幸いここにはゲートがある。これを使えば他国にも一瞬でつく。もちろん向こうのゲートに大人数で張り込まれていたらアウトだが、多少の包囲ならどうにでもなる。

これからの予定を立て終えたとき、沈黙を守っていた一葉の口が開かれた。その言葉はここに来る前にある程度予想していて、ここにきて忘れていたものだった。

「……じゃあしばらくここで過ごしなさい。もとよりそのつもりで呼んだんだし。それまでに私があんたの無実を証明してあげる。

絶対にあんたを殺させやしない」

「ちよつ、それは……」

迷惑かかるし。

そう言おうとしたが手で制された。一葉ならばそう言うと思っていたのだが、ここにきた安堵でそのへんを考えていなかった。彼女の顔を注意して見ると僅かに憤怒に顔を歪めている。だがそういうわけにもいかない。

「……そこまで迷惑をかけられない。それに俺は指名手配になる

だろうし、そんなことすれば一葉だけじゃなくて紅葉にも迷惑がかかる。第一あんたはこの理事長だ。責任取らされてやめさせられたらどうするんだ？」

「指名手配になんてならないわよ」

「・・・は？」

あまりにも平然と言つてのける彼女の言葉を俺は一瞬理解することができなかった。

「何言つて——」

「あんたは仮にもこの国で英雄なんて呼ばれてたんだから公表したらえらいことになるでしょ」

「・・・あー」

なるほど。

すごく不本意であるがそれならば納得できる。確かに俺が犯罪なんてしたつて言ったら全世界パニックものだろう。俺の名前は五年前の出来事で知れわたつてしまっている。

「だけどさ・・・」

逃げ道が見つからず口ごもってしまう。否定の材料が見つからない。そんな俺の態度を見て一葉は優しいげな声音で囁きかける。

「あんたは今まで一人でなんでもかんでも背負ってきたんだから、たまには他人を頼りなさい。確かに私はあんたに恩がある。けどだから助けるんじゃないの。困ったときはお互い様よ」

いつもの穏やかな笑みを浮かべる彼女に、俺は俯きながら「ありがとう」と呟いた。それが彼女に伝わったかはわからない。向かい合つてそんなことを言うなんてなんだか照れ臭い。

顔を上げて俺も心からの笑みで答える。もう心は決まった。

「じゃあ世話になることにする。もし面倒ごとになりそうになったら捨ててくれていいからな」

「そんなことしたらあの子たち殺されちゃうわよ」

一葉の冗談で笑い合い、この話はこれで終わりとなった。

今思えばこの決断で俺の人生が180度変わったんだろう。もしあのまま逃げ続けても禄なことにはならないのは目に見えているのだから運命ってのは皮肉なものだ。

episode 2
なんで疑問系？

血溜まりの市街地を俺は血の滴る剣を握って歩いていく。

まだ足りない。

俺の中で何かが囁きかける。

足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない足りない。ない。

禄に考えられなくなった頭の中で、俺は求め続ける。

あいつらを殺せ。

兄さんを殺したあいつらを殺せ。

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い。憎い憎い憎い。

既に頭の中は既にそれだけしか考えられない。体は勝手に殺すべく敵を求め続ける。

ひたすら歩き続けると視界に軍服を着た20名程の男たちが映つた。

向こうも俺に気づいたようで10人程がこちらに向かってくる。

手にはそれぞれ武器が握られている。

——復讐だ。

駆け出し、剣を構える。一瞬で距離を詰め、一番前の低空姿勢で走ってきた男を斬り伏せる。血飛沫が上がり、顔に赤黒い液体が纏わりつく。だがそんなものは俺の意識にすら入らない。

そんな俺の姿を見て、周りの男たちの顔が恐怖で歪む。今はその表情を見るたびに心地よい達成感が全身を包む。

もつとこいつらに絶望を。

手近に居たやつの腕を斬り飛ばす。苦痛の悲鳴を上げる男を放置して他の奴らに斬りかかる。

腕。胴。足。首。

気付けば辺り一面にバラバラの死体と血の海が広がっていた。

もつとだ。

もつと殺さないと。

「・・・またか」

意識が覚醒していく。薄暗い部屋の中呟く。今日の夢も最悪だな、などと苦笑しながら内心で呟く。気付けば背中がじつとりと濡れていた。

ここ五年間、良くさつきと同じ夢を見ることがある。
嫌な夢だ。

忘れてしまいたい記憶。でもうまく忘れられないらしい。現に今でもまだ鮮明に覚えている。

そんなモヤモヤした気持ちに浸っていると、いつもと違う違和感を覚えた。視線を動かすとどうやら俺が寝ていたのは見慣れない部屋のソファアだったらしい。

「・・・あー」

するとすぐに昨夜の事を思い出した。

あの後一葉と入学についての説明を受けたあと、まだ正式に転入していないから寮の部屋を使わせることはできない、ということと都市庁（一葉が昨日呼び出したでかい建物のことだそうだ）の15階、つまり昨日行った理事長室のすぐ下の宿直室で一夜過ごすことになったのだ。本当に彼女には頭が上がらなくなるな。

ソファアから起き上がり、バスルームへ向かう。この宿直室にはバスルームやトイレまで完備されているらしい。

服を脱ぎ捨て、蛇口を捻る。勢いよく冷水が出てきたが、構わず体にかける。徐々に温度が上がっていき、丁度良いお湯になったところで体を洗う。

数分間浴びると蛇口を閉じる。バスタオルで体を拭き、先程まで着ていた服を着ろうとするが止めた。そういえば昨日はこの部屋に

たどり着くとそのまま泥のように寝た。当然服は着替えてなかったので汚いし、所々破れたり焦げたりしている。

昨日の帰りに一葉に新しい着替えと制服を貰っていたので問題無いのだが、なんだか捨てるのも勿体無いなあ、などと思う自分も居る。

数分悩み続けて結局捨てることに結論づけ、制服に着替える。

まだ登校するには二時間程早く、どうするか再び思考する。

コンコン。

うんうん唸っていると澄んだノックの音が聞こえてきた。

「は——」

はい、と答える前に扉が開けられた。こんなふうに入ってくる人物を俺は一人しか知らない。

「おっは・・あれ？なんで起きてるの？」

「寝てたらどうすんだよ・・・」

入ってきたのはやっぱり一葉だった。溜め息を吐きながらの抗議もこれも予想通りスルーされた。

「まあいいや。さ、行くわよ」

「行くってどこに？」

いきなり言われても理解が追いつかない。

「どこって、学校？」

「なんで疑問系？」

的確にツツコミを入れていく俺。うん、絶好調だな。

「ほら、あたし一応理事長だから。今日高校に用事あったし、ついでにと思って」

ニコニコしながら俺の手を引っ張る一葉に、「わかったから引っ張るな」とついて行く俺だった。

登校中はまだ時間も早いということもあり、あまり注目されずにすんだ。

そんな中一葉が「学校大きいよー。顎外れちゃうかも」などと言やニやしながら言うてくる一葉に「まさか」と真っ向から否定。そんなはず——。

「…………でかつ」

…………あつた。

横で腹を抱えて笑う一葉など気にも止めず、俺は“それ”呆然と見続ける。

学校が見えない。正確には校舎が見えない。目の前に広がるのはバカでかい校門と柵ばかり。一体どれだけ金使ってるのか、などと考えるのも馬鹿らしくなるほどの広大さだった。

「…………帰っていい？」

「だーめ」

逃げ出そうとする俺の腕をがっしりホールドする一葉。傍から見ると腕を組んでいるように見えるのだが、そんなこと意識する余裕なんてない。

校門をくぐり、五分程歩くとようやく校舎が見えてきた。

「森の中の城みたいだな……」

もう驚くのも馬鹿らしくなってきた。城と呼ぶに相応しい校舎の広さに、初代理事長、各国首相に脱帽。

中に入るとやっぱり生徒は疎らだが、俺と一葉を見るとギョツと目を見開く姿に苦笑いを浮かべるしかない。

一葉は理事長だ。この都市のトップが俺みたいな一般生徒と一緒に歩いていると必然的に目立つ。

今が登校時間じゃなくてよかった、などと場違いな安堵をしていると突然一葉が足を止めた。訝しく思っただけで足を止めた部屋を見る。

校長室。

そう書かれた部屋の前で彼女は深呼吸をしだした。

たかが高校の校長室に入るだけで何を緊張してるのだろうか？

一葉の方がよっぽど権力強いだろうに。

そんな俺の疑問を察したのか彼女は振り返り、小声で囁きかけてくる。

「ここの校長、ほんとムカつくの。何か嫌なこと言われるかも知れないから気をつけてね」

「げっ。まじで」

そんな奴が校長なんてしてて大丈夫なのだろうか？などと呑気なことを考えていた俺は、この後その嫌な校長に直面することを覚悟して一葉のノックを聞いた。

episode 3 愚親賢子

コンコン。

「どうぞ」

中から男の声が響いてきて、入るように促される。

「失礼します」

「失礼しまーす」

一葉はキチンと、俺は間延びした常套句を告げて扉をくぐった。

中は思ったより広いのだが、殺風景という言葉が似合う程物が置かれていない。あるのはソファアーが3つ、その間に長方形のテーブルが一つ、システムデスクが一つといったところだ。

そんな部屋に一人だけ、システムデスクの机にもたれてこちらを見ている人物がいた。

40代後半ぐらいだろうか。金髪の長髪を後ろで束ね、常に不機嫌そうな仏頂面を顔に貼り付けた男。

こいつか。

一目見ただけであまりいい印象を受けないこの男は、こちらの心情などお構いなしに口を開いた。

「・・・はじめまして、だな。ここの校長のマルク・ハイリルだ。お前がこの高校に転入してくるなんていう馬鹿者か。どんなコネを使ったかしらんが、試験もすっ飛ばして転入とはいい度胸だな」

「はあ？」

綺麗な発音の日本語とは裏腹に明らかな敵意を含ませた発言。さすがにこれには力チンときた。こちらを伺う一葉とアイコンタクトを開始。

（このおっさん殴っていいか？）

（だめ。ここに入学できなくなるし、下手すれば追放されるわよ？）

（くっ！止めないでくれ一葉！男にはやらねばならぬときがあるんだ！）

（セリフはかつこいいけど動機が不純です、三点）

（せんせー、満点がどれくらいかわりませーん）

そんな茶番劇をなんと1秒の間に済ませて、なんとか平静を取り戻した俺は満点の笑顔を浮かべてマルク校長に向かい直す。引き吊つてるなんて言われなくてもわかつてる。

「じゃあ、どうしたら転入させてくれるんですかー？おっさんの気分になんて付き合ってられませんよー？」

うん。多少悪態吐くのも仕方ないだろう。ム力つくもん。それぐらい勘弁してほしい。

だが向こうは俺の言葉で眉間に皺を寄せて俺を睨んでくる。おー恐い。

「ずいぶん生意気なクソガキだな。よからう、転入試験をさせてやる。感謝して平伏せ」

「さすがおっさん。やっぱバカは扱いやすいつすね」

がはははは、と笑う俺と校長。視線と視線が交わって火花が散ったような気がするのだが錯覚か？

そんな俺と校長をハラハラしながら挙動不審に見守る一葉。もうパニクっているのだろう。口をパクパクさせて金魚みたいだ。

「で？何すればいいんだ？まさかおっさんに勝てばいいってのか？腰が抜けてもしらねーぜ？」

「慌てるなクソガキ。お前如きに私が相手するものか」

そう言うとおっさん——もとい校長は携帯を耳に当てて誰かと通話しだした。

数分後、部屋にノックが響いた。校長が「入れ」と言うとドアが開かれる。

入ってきたのは金髪を短く切った、いかにも体育会系の若い男だ

った。

「なんだよ親父？いきなり呼び出したりして」

「ヘイル。ちょっとこいつを懲らしめてやれ」

「は？」

親父と呼んだからには息子なのだろう。ヘイルは父親に言われたことを理解できていないのか、首を傾げていた。

「転入試験のことだ。このクソガキがお前に勝ったら転入といった形でな」

「ちよっ！？それはやりすぎだろ！？俺も一応ここの教師だぞ！？」

混乱しているヘイルを見ながら息子はまともなんだな、と一人で納得していた俺は、話がややこしくなるまえにまとめることにする。

「別にいいですよ。そこのおっさん、絶対折れそうにないですし」

「え！？ま、まあそうなんだけど……」

口ごもるヘイルに止どめの一撃。

「それに俺強いですし」

俺の自信過剰な態度にムツとしたヘイル先生は、予想通り俺に向き直る。

「……わかった。適性があるのであれば俺の方から推薦を出す。

その辺は心配しなくていい。じゃあアリーナに向かうか」

「わかりましたー」

いい人だな、などと感慨に浸りながら俺と一葉はヘイルについていく。後ろでおっさんが「ふん」と、鼻を鳴らしていたがスルーした。

愚親賢子。ふとそんな言葉が俺の頭をよぎったのだった。

episode 4 手品師じゃなくて魔術師ですよ

ヘイル先生に付いていき、校舎を出て五分ほど歩いたところにそれはあった。

「・・・東京ドーム？」

「アリーナだ」

我らが日本の比較対象と同じ大きさだと！？俺の反応に苦笑しながらヘイル先生はアリーナへと入っていく。

アリーナ内はとてつもなく広い。

魔法を使った模擬戦闘を行うための物なのだから広くて当然なのだが、どうしても「これ作るだけでも相当金使っただろうな」、などとここに来て何度目かの疑問を浮かべてしまう。

アリーナ中央まで到着すると、ヘイル先生は親切にも解説をしてくれた。

要約すると、このアリーナには上級魔法の結界が張り巡らされており、観客席から球技場に魔法を放つことができない。逆もまた然り。つまり暴れまわっても壊れないというわけだ。

もう一つは試験について。模擬戦形式で行い、相手を戦闘不能またはギブアップさせれば勝ちとなるらしい。

「——まあそんなところだ。審判はあそこにいる二人の教員にしてみよう」

ヘイル先生の指差す方向を見ると、黒髪と水色の髪の二人の女性が手を振っていた。

「じゃあ手早く終わらせよう。親父の説得には時間がかかりそうだしな」

そう言ってさがる先生。完全に俺を見くびっているな。

心の中で少しイラついたそんな自分に軽く自己嫌悪して歩いていく男性を見守る。

15メートルほど離れたところで止まり、こちらに向き直る。

「ジェネレート」

そう呟いたヘイル先生の手が光が収束する。光が消えると手には斧が握られていた。

武装召還。

従来の魔法使いのような魔法書を持つて呪文を唱えるようなことは現在ではなくなった。魔法書の代わりとなったのが補助武装。特殊な加工が施されたそれらは、魔法が研究されて科学者たちによって作り出された言うなれば魔法の簡略装置。予め武器に術式を組み込むことで、発動速度を大幅に短縮するこれらには大きく分けて三つ存在する。

一つ目は特化型。

大量の術式を保存でき、魔法だけを使うことに特化した補助武装。精霊術師や召還術師、魔術オンリーの魔術師によく好まれる。

二つ目は武器型。

魔法を戦闘の補助として使う、現代で最もオーソドックスなものである。使える術式が少ない代わりに武器として扱われるという利点がある。

最後はそのどちらにも含まれない伝説武器^{レジェンダリーウェポン}。これは現代では実現不可能と呼ばれた二つを合わせた補助武装。古代の人類が作ったこ

れらは大量の術式を保存でき、武器としても最上級、それに加えそれぞれに解析できない術式が備わっているらしい。

ちなみに超能力者は補助武装を使わない。元々一つのことの特化した超能力たちは使う必要がないのだ。

ヘイルが握っているのは武器型の補助武装。太陽の光を浴びてキラリと光る刃を見るだけで手入れが行き届いていることがわかる。それを構えて俺に聞こえる声で呼びかける。

「おい！武器ださなくていいのか？」

「あー……わかりました」

言いながら俺は手に武器を呼び出す。光が収束していき一つの形となる。現れたのは銃。

「ほう。珍しいな」

ヘイル先生はまじまじと俺の手を眺める。少し居心地が悪い。

「ほら、ヘイル先生。戸惑ってるじゃないですか」

「確かに銃使いなんて珍しいですけど、ジロジロしすぎです」
女性陣二人がからかってくる。

彼女たちの言ったとおり銃使いは珍しい。剣などと違ってこちらは接近戦はできない。かと言って長距離なら特化型のほうが断然いい。銃の利点としては、その連続性。引き金を引けばそれだけで銃弾が飛んでいくため、補助武装によって魔法を纏わせればいいだけだ。

そんな中途半端な位置にいる銃を使う者はあまりいないのだ。

「むっ、すまんすまん。ついな」

ばつが悪そうに頭を掻くヘイル先生。悪気はないだろうから別に

いいんだが。

「じゃあそろそろ始めましょうか」

黒髪の女性教師がそう呟くと、俺とヘイル先生が睨み合う。場を静寂が支配する。

「始めてください」

先ほどの黒髪の女性教師が宣言するとヘイル先生が突っ込んだ。た。

ブウウオン!!。

胴に斬り込んできた斧を後ろに飛んで交わす。空を切る音だけでこんななのだから余程の威力があるのだろう。さすが教師だ。

再び斬りかかってきたところを銃で牽制。斧で弾かれるが動きを止めることには成功した。

ふう。あれ受け止めたら痛そうだな。

そんなことを思いながら俺はヘイル先生を観察する。

一見パワー型にも見えるのだが、スピードもそこそこあるようだ。魔法はまだ見ていないが身体強化はなかなかのものだろう。(身体強化とは魔力を体内で循環させて身体能力を向上させる技能のことだ。)

授業までまだ時間があるとはいえ、教師までそうだとは限らない。余り迷惑をかけるのもどうかと思うのでなるべく早く終わらせることに決めた。

再び突っ込んできたヘイル先生。魔力を集中させ、それを銃弾に纏わせるようにイメージする。

【炎属性添加：銃：纏^{まとい}】

武器型で最も用いられる属性添加魔法。名前の通り属性を物体に付与させる魔法だ。

炎属性の魔法を纏った弾丸はヘイル先生の胸に向かって飛んでいく。先生は斧を胸あたりに持って行き盾にしようとする。

「そんなの・・・」

無駄だ、と続けようとしたがすぐにそれは起きた。

バキィーン！！

甲高い金属の音がアリーナを包み込む。俺以外のこの場の三人が斧を見て呆然としていた。

弾丸は斧にひびを入れて制止していた。折ろうと思えば折れたが、それだとヘイル先生に貫通してしまう可能性があったのでそうしなかった。

驚愕から立ち直ったヘイル先生は再び2本目の斧を取り出そうとするが、それよりも早く俺は走り出す。

三メートルを切ったところでヘイル先生の武器が形を結び、俺に振り下ろしてくる。

バキィーン！！

再び金属の甲高い音が響く。今度は銃で打ったのではない。刀で切ったのだ。

先程まで何もなかったはずの右手に刀が握られていたことに再びヘイル先生は驚愕の表情を浮かべる。

マジック・トレース
瞬間展開。

武装展開をする際には必ずタイムラグが存在してしまう。武装展開は武器が自分の手に握られていることを想像し、それが明確に身を結んだところで別空間から呼び出すといったものだ。人間の思考には時間がかかる。だが俺には何故かそのタイムラグが存在しなかった。一葉にそのことを教えたら瞬間展開と勝手に名付けられてしまったのである。

もちろんこんなこと知らないヘイル先生は、刀を首に突きつけられていると言っのに未だ驚愕から抜けきっていないようだ。一葉などその反応を見て必死に笑いを抑えている。

「……驚いた。おまえはきつと手品師に成れるな。俺が保証してやる」

「俺は手品師じゃなくて魔術師だからな」

軽口を交えてようやく落ち着いたヘイル先生と向かい合う。するとどこから拍手が聞こえてくる。辺りを見回すと女性陣三人が手を叩いていた。

「いやー、すごいね。ヘイル先生ってAランク魔術師なのに」

「生徒に負けただってことは退職ですね。今までお疲れさまでした。辞表は今日中にお願ひします」

「ちよっ！それはさすがに……」

女性教師二人にいじられているヘイル先生を生暖かい目で見る俺。

そんな俺のところにトコトコとやってくる一葉。

「・・・瞬間^{マジック・トレース}展開まで使って良かったの？」

「まあ、どの道これは使わないと不便だからな」

「まあ、あんたがいいならいいんだけどね」

それで話は終わりとばかりに目を逸らす。少し俺より小さい一葉と一緒に未だにいじられ続けているヘイル先生たちを見守り続ける。

・・・あ、こけた。

episode 4 手品師じゃなくて魔術師ですよ(後書き)

戦闘描写難しいorz

感想お待ちしております。

episode 5 自己紹介で再会

その後、さんざんいじられてげっそりしたヘイル先生、いじりまくってつやつやしている黒髪女性教師——白貝清子先生しらがい きよこ——と、柔らかな笑顔を浮かべる水色髪の女性教師——ミレア・フォーカス先生——、俺、一葉で校長室へ向かった。

おっさんこと校長は最初俺が来たとき仏頂面を崩してニタニタしていたのだが、息子が負けたことを聞いて顔面蒼白に。終始不機嫌だったおっさんに、今度は俺がニタニタする番となった。

結局俺の転入は認められ、今は俺の担任となったミレア先生に教室へと案内してもらっているところである。ちなみに一葉は校長室で話があるとかどうか。

今はHR間際なので生徒の数が少ない。前を歩くミレア先生は柔らかな笑みを浮かべたままだ。

俺たちはそのまま時折会話を混ぜながら教室へと向かった。

「ちょっと待っててね」

そう言われて何分たった？いや、実際の時間はそんなにたっていないはずだ。じゃあなんてこんなに時が進むのが遅い。

緊張している？

ま、まっさかー。国際会議に出席した時でも緊張なんてしなかった俺に限ってそんなことはないだろー。あの時は黒スーツの怖いおっちゃんたちに睨まれてたのに。

あ、あれ？

なんか足がカクカクしてきたぞ？　ち、違う。断じて違うぞ。これは武者震いだ。そう、これから行われるだろう強敵たちとの激戦――。

「華瀬くーん。入っていいわよ」

「は、はい！！」

うわやばっ。声が裏変えっちゃった。

教室内からクスクス、ハハハ、などと笑い声が聞こえてくる。くそう、お前らも同じ立場に立てば俺と同じようになるんだからねっ！（ツンデレか俺はっ！！・・・はあ）

つい自分にツツコミを入れてしまった。もうどうにでもなれ。俺は意を決して教室のドアを開けた。

「・・・ん？」

どうした？なんでみんなそんな口を開けて啞然としてんだ？

（え、ばれた？）

だが俺はマスコミの取材なんかは断っていたから外見だけでバレるはずがない。

頭に疑問符をいくつも浮かべる俺だったが、すぐに変化は起こった。

「き・・・」

「木？」

「きた~~~~!!!!」
「うおっ!?!」

いきなりの絶叫に比喻ではなく教室が揺れた。

「え?なにになに??」

あつと言う間に俺の周りに生徒が集まりだした。その中心は女子ばかり。

「あ、あのっ!彼氏とかいますか!?!」

「あ、ずるい真由!抜け駆けは許さないよ!」

「猿ばかりのこのクラスにとつとつ恵みが。神様ありがとう・・・」
「泣かないで結衣。これからは猿どもなんて気にしなくてすむんだから笑顔でいましょう」

『んだところああ!!!』

男子の怒りを物ともせず、というより平伏させて騒ぎ立てる女子。意味がわからない。

もう頭の中は混乱を通り越してパニックだ。もうなにがなにやら。

そんな中一人の女生徒が人垣に埋もれながら俺の前にやってきて――。

「え?」

――いきなり抱きついてきた。周りからは悲鳴が上がる。あれ?・・・・

長い黒髪、表情は見えないが覚えのある髪留め、俺よりも頭一つ小さい背丈。
ポン。

いきなり胸を叩かれた。大して痛くは無いのだがその拳が俺の心に響いた気がした。

「も、紅葉!？」

「・・・悠のバカ。何も言わずに出て行って。心配・したん・・・だから」

切れ切れに発せられる澄んだ声。覚えてる、いや忘れるはずがない。

「・・・ごめん」

「・・・バカ」

顔を埋めてくるこの少女は波風紅葉^{なみかせ もみじ}。一葉の妹にして俺の幼なじみ。といってもそこまで付き合いが長いわけではない。

俺は一時期波風家に居候させて貰っていた。諸々の理由で情緒不安定になっていた俺を引き取ってくれたのが一葉だ。

そんなわけで俺は波風家に大変ご恩があるわけなのだが、その話はまたの機会に。

そんな感慨に浸っていると、周りの生徒は何が何やらといった感じで静まり返っていた。

「あー、すまない。自己紹介してなかったな。俺は華瀬悠希。紅葉の友人だ。これから一年間よろしく頼む」

先程の緊張などどこ吹く風、俺は場を収めるために改めて自己紹介する。そんな俺の対応のお陰か、生徒たちは平静を取り戻したの

か「よろしくね」「よろしく」などと返してくれた。

予想外な出来事が起こったがこれから騒がしくなるな、などと呑気にも思った俺だった。

episode 6 後でゆっくり話を聞かせてもらおうか♪

騒がしい自己紹介を終え、生徒たちがそれぞれの席に散っていく。紅葉も名残惜しそうにしていたが俺が言うのと渋々戻っていった。俺はというと、ミレア先生に促された席へスタスタと歩いていった。

「よつ。俺は黒崎ライラ、ライラでいいぜ。半分日本人の血が入ってるけど出身はドイツだ。よろしくな」

丁度席についたとき前の席から声をかけられた。そこに居たのは銀髪黒目の人懐っこそうな少年だった。

「ああ、よろしくなライラ。俺は……自己紹介したっけな」
苦笑しながら頭を掻く。

「悠希でいい。出身は日本だ」

そう言っただけで握手を交わすと、ライラは満足したのか満面の笑みを浮かべる。

「私も隣だからよろしくね、悠」

隣から声をかけてきたのはもちろん紅葉。こちら満面の笑み。

「ああ、よろしくな」

俺が言うのと同時に授業開始の鐘が鳴った。

退屈だ。

今は魔術学の時間。この学校では魔術師、精霊術師、召還術師、死霊術師、超能力者の線引きは無い。現にこのクラスでもこれらの術師が混ざり合っている。授業も一緒、模擬戦も一緒、寮も一緒。こっうやって他の術師への偏見を無くしていく目的なのだろう。いいアイデアだと思う。思うのだが。

退屈だ。

今日何度目かの呟きを心の中で吐き続ける。

レベルが低い。そう思った。

ここはほぼ強制的に小学生から入学させられるため、エレベーター式がほとんどだと言っていたのでそこそこ面白い授業かと期待していたのだが。

授業終了まで残り三十秒。だが一秒一秒が長い。まるでさっきの自己紹介前のような感覚だ。

15、14、13、12…………。

そう言えば昨日追われてたときもゲートまでの距離を数えてたなあ、などと下らないことが頭をよぎった。

10、9、8、7、6…………。

残り十秒を切った。早く追われ早く追われと念じ続ける。

5、4、3、2、1…………。

「ゼロ」

キンコーンカーンコーン。

呟くと同時に終令になる。号令をして教師がでていく。授業が終わった。

「終わったー・・・」

「おつかれー」

机に突っ伏す俺、苦笑しながら振り返るライラ。

「昼休み終わったらまたあるんだけどね」

と、紅葉。うげえ、まだあんのかよ。

「昼飯どうする？俺腹減ったわ」

突っ伏したままポツリと呟く。早くこの体力を回復しなければ午後まで持たない自信が俺にはある。

「あ、ちよつと待って、もう少し——」

紅葉が言い終わる前に教室のドアが勢いよく開かれた。クラス中がそれに注目し、俺たちもそちらに振り向く。

黒髪を肩ぐらいで切りそろえ、前髪も揃えた可愛らしい少女が息も絶え絶えに立っていた。

その少女はこちらを見ると小走りにやってくる。

「悠お兄ちゃ〜ん!!」

「げふっ!?!?!」

いきなり飛びついてきた。お陰で俺は真後ろから倒れ、頭も強く打った上に鳩尾に頭が入ってしまった。

きつと俺の頭には多数の星、またはひよこが回っていることだろう。

「さ、桜っ!!悠ぐったりしてるっ!!!」

「わわっ!!どうしようお姉ちゃん!?!」

そこからどれくらいくれるだけですごくありがたい。

テンパっているこの少女は一葉と紅葉の妹の波風桜。なみかぜ さくら おっちよこち

よいなんだか確信犯なんだか天然なんだかよくわからない子だ。
現在、俺の上、もつといえは鳩尾に桜が座っている状態。桜が動く度に膝が入ってももの凄く痛い。

だが、幸か不幸かこの体制だと桜のスカートの中身が見えてしまいそうなのだが。

（いやいやいかなだろ！？相手は桜だぞ！？）

妹のように接してきた桜にそんな下心を向けていいはずがない！！
いくら美少女だからといってもこれだけは譲れないっ！！

「あつ！ご、ご、ごめんなさいっ！！」

するりと俺から降りる桜。

ふう、危なかった。色々な意味で。

「ご、ごめんねお兄ちゃん。お姉ちゃんに念話でお兄ちゃんが帰ってきたって聞いていてもたっても居られなくて・・・」

上目遣いで見つめてくる桜。そんな捨てられた子犬みたいな目で見つめられると怒るもんも怒れないではないか。

「・・・いや、俺も突然いなくなったりして悪かった。心配かけた」
頭を下げる、すると再び桜に抱きつかれた。

「・・・もうどっかいつちや嫌だよ・・・もう、戻ってこないかも
って・・・」

嗚咽を漏らす桜の頭を撫でてやる。柔らかい髪を梳くとミントの香りが広がってくる。俺は昼飯を蹴ってでもそのまましていると決意した。

結局桜はすぐに泣き止み、俺、ライラ、紅葉、桜の4人は学食で昼食を取るようになった。

この学園は人数も尋常じゃないらしい。現にバカでかい学食内は人で溢れかえっている。俺たちは奥の空席を見つけ、桜とライラに場所取りを任せ、俺、紅葉は食券を買いに行くことになった。

「・・・ねえ」

販売機の列に並んでいると紅葉は深刻そうな顔でこちらを伺ってきた。

ああ、なるほど。

「なんで出て行ったのか、だろ？」

俺が先回りして言うとかクンと一回頷いた。

「別に。任務で出てただけだ」
嘘を吐いた。

「・・・そう」

紅葉が背を向けると同時に俺の体を刺すような痛みを伴って罪悪感が沸き上がってくる。

ごめんな。

言葉にしなければわからないとわかっているのに俺は心の中で呟いた。

俺たちはテーブルを囲んで昼食を取る。だがしかし・・・。

「なんかさっきからジロジロ見られて落ち着かねーな」

「そうかな？」

桜が可愛らしく首を傾げる。なんだかりスみたいだな。別にシスコンじゃないんだよ？

兄妹ではないから別にシスコンではないのだろうがそれはそれ、これはこれだ。

因みにみんなのメニューは桜と紅葉が鮭定食、ライラが肉うどん、俺がエビフライ定食だ。

「そりゃー、高嶺の花と今まで数々の男共が挫折してきた波風と中学トップの美少女の桜ちゃんと一緒に昼食なんて、この学園都市在住の生徒に喧嘩売ってるようなもんだしな」

「あー、納得」

この幼なじみ二人に適う美少女なんてそうそう存在しないだろう。

彼氏の一人や二人できてもおかしくないんだがな。

「私ってそんなに話がたいかしら？」

「多分な。俺は小学からずっと同じだったから気にならないけど」

紅葉が不満そうにライラを睨む。そうか二人は小学から一緒・・・。

「は！？マジで！？」

何？ってことは彼氏彼女てきな関係でも――。

『違うつー！』

「うおっ！？」

思考を読まれただど！？身を乗り出し、二人共顔を真っ赤にしながら詰め寄ってくる。え、エビフライが落ちるって！！

「なんで私がこいつと付き合いなきゃならないのよ！！」

「そうだぜ！！好きだったのは中二までで、今はどうも——」

場の空気が凍った。いやマジで。自分の失体にようやく気付いたのか、赤面を通り越して蒼白になったライラに俺は慈愛の笑みを浮かべる。

「ライラ」

「ゆ、ゆうき」

涙目ですがりついてくるライラ。

「後でゆっくり話を聞かせてもらおうか」

「・・・・・・・・・・イイイヤアアア！！！！！」

食堂内に絶叫が響く。

俺の笑顔は無慈悲な天使のそれだった。

「・・・・・・・・俺が惚れてたのは小5のときだった」

精気の無い瞳で罪を告白するがごとく一方的な恋バナが始まった。

場所は寮の俺の部屋。

授業が終わって放課後、ミレア先生に寮について聞いたところ、1708号室を使っていいとのこと。偶然にもライラの隣で、この真上が紅葉と桜の（姉妹ということで同室）部屋だ。

そんな俺たちが何故俺の部屋に集まっているのかというと、ライラの暴走によって思わぬいじりネタを見つけたからである。

手筈はこうだ。

まずライラを捕獲。止めに来た紅葉を魔法で拘束。実にシンプル、そして堅実的だ。

予定通りライラを捕獲し、紅葉を拘束。部屋の隅でウーウー唸っている。桜はというと、意外にもこの手の話が好きなのか目をキラキラさせてライラの話の聞こえ方として聞いている。

そして色々尋問——もといいお願いをしたらすんなり口を割り出したのだ。

「その頃の紅葉は、すげー明るかったんだ。一回聞いたんだ、なんでそんなにテンションたけーのかって」

「波風」って呼んでたのに今は「紅葉」なんだな、と思ったが口にはしない。

「そしたらさ、あいつ『王子様が助けてくれたの』、って嬉しそうに言ってる。そんなときはその誰とも知らないやつに嫉妬したよ。でもいつか俺が紅葉を守ってやるって決心して対抗心燃やしたっけな・・・」

自嘲気味になってきたライラ。なんだかかわいそうに思えてきた。それにしても王子様ねえ、そんなやついたのか？

「でも、中二んときには変わっちゃまって、いつも寂しそうに俯いて

たんだよ。表面は笑ってるけど内心は泣いてる。そんときに確信した。あいつがどこかに行ったんだなって」

だんだんシリアスになってまいりました〜！

さて中二ね・・・俺と同時期に紅葉の前から消えたやつってことか。

「こうなったら俺が紅葉を守ってやる。ついにその時が来たって思っ
て、思い切って告白してみたんだ」

おおー！！

「結果は見事撃沈。そんときのセリフがこりやまた傑作で『私はあ
の人を待ち続けるから』だってよ。そこで俺の初恋は終わっちまっ
た」

話終わると魂が抜けたようにその場でボーッとしだすライラ。紅葉
のほうは・・・。

「おい、紅葉？」

「・・・・・・・・」

返事がない、ただの屍のようだ。

桜はというと、うっとり肌をツヤツヤさせている。よっぽど満足
だったんだな。

こうしてこの第1回恋バナ選手権は幕を閉じた。

episode 6 後でゆっくり話を聞かせてもらおうか♪（後書き）

感想お待ちしております。

episode 7 強者の余裕

「おつす!」

「……………おう」

部屋を出ると、ちょうどライラと鉢合わせになった。だが、俺が声をかけてやっているのにまったく元気がない。

「どうした?俺が声かけてやってるんだから元気出せって」

「いや、寧ろ朝からテンションだだ下がりだ。どうしてくれるこのやろっ」

む、俺の何処に不満要素があるんだ。この心優しい――。

「ならば聞こう。お前は昨日俺に何をしたでしようか」

こ、こいつ読心術の心得でもあるのではなからうか?

「え?昨日?うーん。鬼ごっこ?」

「その小学生みたいなごまかしで通用するとおもってんのかよ。ちなみに読心術なんてやったこともない。お前は考えてることが丸わかりなんだよ」

な、なんだってー!?

うーん、このリアクションはイマイチだな。

そんなバカな考えは置いといて、俺ってそんなにわかりやすい性格しているだろうか?自分ではそんな風におもったことないのだが・・。波風姉妹には何故か読まれるのでそういう血筋かと真剣に考えたこともあったのに。まあどうでもいいっちゃいいんだが。

「ほら、気にすんなって。過去を振り向いてばかりでは前に進めないぞ!」

「振り向かせる原因になったお前に言われたくない!」

朝から近所迷惑も考えず騒ぎながら学校へ到着。

「だから土属性の魔法は近接戦の補助としてばかり使っんじゃ無くてだな」

あれ？なんか最初の時と違って俺の魔術講義が始まっている気がするのだが。

「いや、でもよお——」

「あ、紅葉おはよー」

ビクウツ！！

「ん？どうした二人共？」

『いやっ！な、なんでも、ないっ！』

声が裏変えった。なんでこんなに焦って——。

「あー、昨日のことか」

ビクウツ！！

また反応した。

つまり昨日のぶっちゃけトークのせいで気まづくなっちゃった、というのか。

「まあ気にすんなよ、な？」

『誰のせいだ！！』

「え？俺のせいなの？」

あくまで白を切る俺。それを涙目で抗議してくる二人。数分間そんなやりとりをしていると我らが担任のミレア先生がやってきた。

「はいはい。席についてくださいねー。HRを始めますよー」

間延びした声に渋々席に戻る、といっても前と左だからあまり関係

無いのだが。

「では今週末からの学年別トーナメントの話をします」

「・・・・・・は？」

え、何それ？なんでみんな何も言わないの？

「あー、華瀬くんには言ってますでしたね。この都市では学期末に学年別に各校舎一纏めにしてトーナメント戦を行うんですよ。こんな時期に転入してきても例外はありません」

「は？各校舎？」

何それ、高校ってここだけじゃないの？

「ええ、この学園都市には高校、中学、小学それぞれ26の校舎があるんです。ここは第11高校。ちなみに大学は専門機関などあるので64となっています」

「知らないんですか？」と言うような目で見てくる先生。に、26！？ていつかここ第11なの？それすら初めて聞いたんですけど。

まあとりあえず。

「せんせー、めんどくさいんで休んじやうかもですけどいいですかー？」

うん、やっぱりめんどくさそうだもの。

「別に構いませんけど、実技の成績がなくなりますよ？」

俺の策を軽々つぶしてくれちゃったミレア先生。げ、それは一大事。

これで夏休み補習なんてなったらたまったもんじゃねーぞ。せつかく夏休み前に転入してそのまま夏休みを満喫、なんて夢い夢を抱かせていたのに。

「ちなみに一位になると実技の単位がものすごく貰えますよ?」

ピクッ

「もう一年間分は余裕であるぐらいの」

ピクピクッ

「そうですか、出場しませんか。それは残念です」

「せんせー！自分、スポーツマンシップにのっとって、目の前の戦いを背を向けるような真似はしません！」

『うおおおい!!』

なんか周りから非難の声が上がった気がするが無視。今の俺の目にはもはや単位しか映っていない。道を阻む者は誰だろうと捻っちゃうよ、俺。

「まあ頼もしい。では、そろそろ終わりにしますね」
あとになって、俺はミレア先生の策にまんまとはまってしまったことに気付いて泣きたくなくなってしまったのだった。

まあ、単位貰えればいいか。

3 限目、模擬戦闘実習。

この時間はアリーナで魔法を用いて戦闘をするといった授業らしいらしい、というのは俺が今までそんなのを受けたことなかったからだ。

「なあー、俺とやろうぜ？」

「えー、なんでライラと？」

「失礼にもほどがあるだろっ！！」

ライラが言ったやろうぜとはもちろん模擬戦のことだろう。だが何故かいきなりキレだした。わけのわからんやつだな。

「ゆう、私とやらない？」

「ん？紅葉か。いいぞ」

『えゝっ！！』

な、なんだお前ら？なんで俺が紅葉との模擬戦を承諾したら『えゝっ！！』などと驚かれなければならないんだ？

首を傾げる俺を見かねたのか、ライラが補足説明をしてくれた。

「波風は中学のトーナメントで6位になってんだよ。そんなやつが転入生をいきなり誘うつてのが驚きなんじゃね？」

あれ？紅葉じゃない。なんてのは置いて、こいつより強い奴が
同学年に5人もいるんだ、などと全く見当はずれの考えをしてい
る俺。

そんな俺の態度をどう解釈したのか心配そうにしているライラ。

「んー、多分大丈夫だろ」

「んな突拍子もないことを・・・」

半ば呆れ気味に溜め息を吐くライラに「まあ、見てろって」と言い
放って紅葉の下に向かった。

・・・ちよつとくさいセリフだったかな？

episode 7 強者の余裕（後書き）

みなさんお気に入り登録ありがとうございますっ！！

本当にうれしいです！！

感想お待ちしております。

episode 8 いいこと（前書き）

瞬間展開の読みを

マジック・トランスから

マジック・トレースに書き換えました。

今までそれを見てきた方、ご迷惑をおかけしてすみません（泣）

episode 8 いいと

俺と紅葉は20メートル程間隔を開けて向かい合う。さっきまで模擬戦をしていた生徒も学年6位の紅葉と転校生の勝負と聞いて集まり始めていた。

「ルールどうする？」

紅葉が問う。

このアリーナに殺傷生のある物理攻撃、魔法は全て受け流される結界が張られているらしいのだが、怪我をしないというものではない。最低でも骨折まで抑えてくれるというだけだ。

だが、その程度の怪我ぐらいなら今の医療で直ぐに治る。なので本気でやり合っても普通は大丈夫なのだ。普通じゃなければ問題大有りなのだが。

「んー、フリーでいいだろ？」

フリーっていうのはルール無しなんでもありのことだ。

まあ俺はあくまで結界の許容範囲内で。

「りょーかい」

言わずとも理解したのだろう。少し不服そうではあるが、すぐに集中し始める。

すでに俺たちの周りには沢山のギャラリが集まっている。さて、そろそろ――。

「「ジエネレート」」

俺たちは同時に武器を展開する。

紅葉の手に光が収束し、太陽の光で鮮やかに光る刀が現れる。

一方俺は両手に二丁の銃を展開。今回は二丁拳銃のオンリースタイルだ。

俺の手に銃が現れた瞬間ギャラリィからざわめきがおこる。

そんなに珍しいのか？慣れれば結構使いやすいんだが・・・。

少々残念な気もするが、まあ取り敢えず置いておこう。正面には刀を構えた紅葉の姿が・・・げっ！目がマジじゃねーかつ！
軽く流そうか、などと考えていた俺とは真逆に彼女は随分気合いが入っている様子。どうしたものか。

「じゃあ俺が審判するぞ？」

ライラが審判に立候補してきた。

「いや、帰れ」

「お前俺にひどくねっ!？」

もう半泣きですがりついてくる勢いで見つめてくるライラ。

「ちっ、しかたねーな」

「俺お前になんかしたか!？」

ごほん、とわざとらしく咳払い。弄ると楽しいなこいつ。

「じゃあカウント始めるぞ?5・4・3——」

なんだか紅葉から殺気を感じるんだが気のせいだろうか？まあいつも殺す気で来いってたのが原因だろう。そうだと願いたい。

「——2・1、始めっ！」

ライラの宣言と同時に紅葉が突っ込んで——。

「はや——」

言い終える暇も無く20メートルの距離が一気に詰められ、様子見だろう横薙の一閃。

それを後ろに飛んでかわすが、再び詰められ切り込まれる。

「うおっ!？」

交わしても交わしても距離を詰められては斬られかける。いたちごっこになってきた。

「——っ!？」

突如紅葉の魔力の流れが変わった（普段垂れ流している魔力から、魔法を使う際に魔力を集中して体外に漏れることに変わる事）。周りの連中には気付かない程の抑えられた変化だが、これは。

「いやいや!!!それはちょっ——」

言い終わる前に紅葉は居合い切りを放つ。だが、先程と違うのは斬線が飛んでくる上に、それに風属性と雷属性の魔法が混じっている

ことだ。地面を蹴り上げ、空中に飛ぶ。

「ばっか！いきなり複合魔法ぶつ放すやつがあるかつ！」

「ゆうにはこれぐらいやらないと勝てないでしょっ！！」

なんか怒鳴られた……。

複合魔法とは、その名の通り別々の属性を組み合わせ一つにした魔法のことだ。普通は高校三年生ぐらいからカリキュラムに含まれていると思うんだが。まあ、一葉の妹なのだからこれぐらいどうってこともないだろう。

今紅葉が放った魔法“風花雷塵”は、風属性と雷属性の複合魔法だ。あんなの食らったりしたら普通は一溜まりもない。

（やっぱり紅葉相手に銃はきつかったか？）

舞の如く振るわれる刀を全て紙一重で避けながら、俺はそんなどうでもいいことに思考を傾けていた。

（うーん……）

どう反撃しよう……。こっちは銃だし、距離を取らないことには――。

（……いや、そうでもないか）

ちょっといいこと思いついた。

その“いいこと”を実行するために魔力を集中させる。

「——っ！！させないっ！！」

俺の魔力の流れが変わったことに気づいたのか、先程より斬線の数が増す。でも。

「好きだらけ」

周りから見るとふざけているように見られるだろう間抜けな声を出して右の銃の引き金を引く。

ズガン。

魔力でコーティングされた普通の銃弾が紅葉の腹部に当たる。身体強化をしてるだろうし、結界もあるからこれぐらいの威力なら問題ないはずだ。

だが、衝撃で数秒彼女の動きが止った。そして予め集めておいた魔力を使い、術式を発動させる。

【氷属性添加：銃：纏・氷結・】

引き金を5回連続で引く。5発の弾丸が全て紅葉——の足下と刀に着弾。

ギャラリーの中では「はずれた!？」なんて言ってる的外れなやつがいる。俺から言わせて貰えば“はずれた”のではなく“命中した

”のだが。

着弾と同時にその部位に冷気が散り、一瞬で周りの水分が凝結。足下や刀が凍り付き、瞬く間に動きを封じる。

もつともポプラーな魔法“纏”ではあるが、その中でも派生系が存在する。普通の“纏”はただ属性をのつけて威力を上げたようなものだが、派生系はそれぞれにオプションを加えた便利な魔法だ。俺の放った“氷結”もその一つで、着弾点付近を凍り付かせる能力がある。

俺は身動きがとれなくなった紅葉に、武器を解除して近づいていき、

「チェックメイト」

そう言い放って指で銃を作り、額に当ててニコリと微笑む。

「はあゝ、降参する……」

溜め息を吐いてそう吐き捨てると、茫然としていた審判のライラが慌てて取り仕切る。

「し、勝者、華瀬悠希っ！」

同じく茫然としていたギャラリー共がその言葉で正気に戻ったのか、途端に歓声を上げた。した。

そんなことを無視して俺は紅葉にかけた魔法を解いてやる。氷が散

り、やっと動けるようになった足を屈伸で解して武装解除する紅葉。

「いやー、強くなったな。最初するときなんてびっくりしたぞ」

「それでも勝てないなら意味ないよ」

口を尖らせて拗ねる彼女に苦笑しながら頭をポンポンと叩く。

さて、取り敢えずこの場をどうやって収集するか考える俺だった。

episode 8 いいこと（後書き）

感想お待ちします

episode 9 嘘

紅葉との模擬戦の後、クラスメートたちの質問責めを華麗にスルーしてライラを弄って適当に時間を潰した。

・・・何かに目覚めかけている気がするが気のせいだろう。

そんなこんなで時は昼休み、場所は食堂。

俺、ライラ、紅葉、それと中等部からわざわざやってきた桜と一緒に食事に勤しんでいた。

今日のメニューは、俺がざるそば、ライラがまたも肉うどん、紅葉と桜が昨日の俺と同じエビフライ定食。

「そう言えば高等部のトーナメントって今週だったよね？」

唐突に桜がそんなことを言い出した。

「ああ、そうみたいだな」

取り敢えず頷いておく。まあどんなのか知らないけど。そんな俺の心情を察したのか、紅葉が補足してくれる。曰わく。

「当日はケータイ端末に開始時刻、次の対戦相手と場所が随時送られてくるの。全高校が参加するから、アリーナからアリーナに移動なんてこともザラにあるわ。だからトーナメント期間中はゲートも

解放されるの。転移してバトって、また転移してっとなるから気をつけてね」

だそうだ。

「うわっ！めんどくさっ！」

「単位は？」

「うっ」

それは欲しい……。くそうっ！！

ニヤニヤしながら見てくる紅葉とライラ。今朝のやり取りを知らない桜は何がなにやらといった様子だ。

「ん？そついや期間ってどんくらいあんの？」

「進行状況にもよるけど土曜日から始まって10日ちょっとあれば終わる、なっ」

ちっ、肉貰おうと思ったら弾かれた。

なるほど10日ね。長いな、めんどいな、でも単位は欲しいな。

「そんな甘いこと言っていないで、少しは特訓でもしたら？」

「ん、まあそうなんだけどな……」

なんだかやる気でないんだよね。

『学年一位は伝説武器保持者なの？一回戦ったことあるけど、むちゃくちゃだったんだから。ゆうは“フランクス”とか“影月”とかも使っつもりないんでしょ？』

ぐーたらな考えを浮かべていたら急に頭の中に声が聞こえてきたの

で少しびっくりしたが、ライラと桜にはまだ話せ無い内容も混じっているので助かる。

『伝説武器持ち？そんな大物がここにいんのか？』

これは驚いた。

伝説武器には普通の補助武装と違っていくつか特殊な性質がある。

その一つが保有者の選択。

伝説武器は所有者を選ぶ性質がある。その判断基準はそれぞれ異なり、ある物は強さ、またある物は強靱な精神力といった具合にだ。それを普通の高校生が扱えるとはね。

それとも俺みたいな異端の存在なのか。

そんな感慨に浸っていると、先程の問いの答えを返していないことに気づいた。

『ん、まあな。あんなのポンポン持ち替えてたらさすがにまずいだろう？』

それが答えだ。

『せめて一個ぐらいは使ったら？』

『この名前だけでも怪しまれるかもってビクビクしてんだ。それに伝説武器保持者なんて今時ググれば一発で出てくる』

『・・・そう』

それだけ交わすと念話を切る。

それから食事を終え、適当にだべって昼休みを平和にすごした。

「はぁ・・・」

自室に戻るなり紅葉はベッドに飛び込んだ。妹の桜は日直で少し遅くなるらしい。

そんな中ふと昨日の昼の悠希の言葉を思い出す。

『別に。任務で出ていただけだ』

「・・・嘘ばかり」

私は別にゆうみみたいな鈍感じゃない、気づいてないとも思っただろうか。

でもそれを問い詰めるわけにもいかない。何か無闇に聞いていい話では無い気がしてならないのだ。

もやもやする感情を持て余していると、机に置かれたケータイの着メロが鳴った。

「姉さん？」

『もー、お姉ちゃんって呼んでもいいって言ってるのにつ！』

なぜかいきなり叱られてしまった。こんなバカなことを一言目に発するバカはもちろん一葉姉さんだ。

「きるよ」

『ちよつとま——』

構わず切る。するとまたすぐに着信がかかってきた。

「・・・なに？」

『ひどいよ紅葉ー、いきなり切るなんて。お姉ちゃん悲しい』

電話越しに啜り泣く声。勿論演技に決まっているのだが。もう一度切ってしまうおか？などと本気で思っていると、泣き声が止み、変わりに真剣身を帯びた声が響いてくる。

『・・・今から理事長室に来てちょうだい。大事な話があるの』

「大事な話って？」

思わず聞き返してしまった。無駄だとわかっているのに。

『・・・来ればわかるわ』

案の定はぐらかされてしまった。とりあえず肯定しておいて電話を切る。

桜に「ちよつと出かけてくる」とメールを送り、外出届を提出して寮を出る。

空は薄暗く染まり、昼間と比べれば大分涼しい風が肌に触れた。

ここから都市庁までそう遠くは無く、ゲートを使う必要も無い。

私は歩いて都市庁まで向かった。

都市庁に付くと、すぐに警備員に通された。

エレベーターで最上階に上がり、廊下を真っ直ぐ突き進むと、一葉のいる理事長室に到着する。

「姉さん、入るよ?」

「はいはい」

さっきの真面目な声はどこに行ったのやら、間延びした一葉の声に促されドアのノブを回す。

「いらっしやうい」

中に入ると二人用ソファーに寝転がって足をバタバタさせている姉の姿が、そこにはあった。

「失礼しました」

「ちよつと紅葉っ!?!ごめんごめん!もうふざけないからっ!ねっ!?!」

腕を掴みながら涙目で謝罪してくる姉の姿を見て、なんだか悲しく

なってくる。

「で、なんなの？」

「うん、大したことじゃないんだけど……」

「さて、桜が待ってるから」

「待つて待つて!!」

一体なんなのだろう？大したことないなら早く帰りたいのだが。目で催促すると、「あゝ」「うー」などと奇怪な声を上げる姉。やがて意を決したように口を開いた。

「……悠希になにか言われた？」

その言葉を聞いた瞬間言いようのない不安感が押し寄せてきた。なんでかわからないけど。

「姉さん、ゆうに何があったのか知ってるの？」

「質問に答えて」

真剣な表情で問い詰めてくる一葉に、私は首を横に振る。

「……うつん。何があったのか聞いたけど、答えてくれなくて……」

「そう……」

沈黙が訪れる。

しばらくすると一葉から口を開いた。ただ、それは予想外の一言だった。

「どうする？教えてほしいなら私の知ってる範囲で教えるけど？」

「えっ!？」

その一言に驚愕していると、一葉はそんなことお構いなしに続ける。

「知りたいんでしょう?どうするの?」

その問いに、私は数秒悩んだ。やがてある疑問がよぎる。

「それは、ゆうも良いつて言ってるの?」

じゃあなんであの時に言わなかったの?

そんな早とちりした考えとは裏腹に、一葉は首を横に振った。

「いいえ、でも紅葉が知りたいなら教えるわよ?」

再びの問い。

だがその瞬間答えは決まった。

「ううん。教えなくていい」

そうだ。教えてもらわなくてもいい。

「どうして?」

優しく尋ねる姉に、私は笑顔で答える。

「だってゆうが話さないってことは、まだその時じゃないってことだもん。私の興味本位でゆうを傷つけるなんて絶対嫌。ゆうは色んなもの背負ってきてるのに、私が足を引っ張るなんて絶対嫌よ」

そうだ。

死ぬはずだったゆうは私を助けてくれた。それが偶然だったってこともわかってる。

でも私は生きてる。

ゆうのお陰で生きてる。

だから私はゆうを守りたい。少なくともゆうが自分の背負った物の重みで潰されないように支えていたい。

「だから私はゆうが自分で言い出すまで待つてる」

私はゆうを信じてるから。

「・・・もう雅人がいなくても安心ね」

「え？」

何か聞こえた気がしたのだが一葉は「なんでもない」と手をひらひら振っている。

気のせいかな？

その後くだらない話に突入しそうになったので、適当に切り上げて寮に戻る。

さっきまでのもやもやが晴れた、そんな気がしたのだった。

トーナメントまで残り4日。

episode 9 嘘（後書き）

感想お待ちします。

episode 10 推薦枠？

7月17日水曜日。

トーナメントまで後三日ということもあって、そろそろ準備が始まりだしたようだ。

何やら屋台も並ぶとか。

そんな今この頃。

サンサンと降り注ぐ太陽の光が心を清々しい気持ちに――。

「なわけあるかつ!!」

「うおっ!？」

――させるわけなかった。

いきなりキレだした俺を何こいつ、みたいな目で見てくるライラ。

俺が今ライラ（ライラじゃないよ？イが多いよ？）している理由を、一言で表すと“暑いから”だ。

「暑いんだよ!! 離れるライラ!!」

「俺のせいだよ!!? いい加減にしる悠希!!」

「うるさい黙れ鉄板野郎!!」

「そこまで熱籠もってねーよ!!」

こんな道のと真ん中で俺たちは何をしているのだろうか？

通り過ぎていく生徒たちは皆俺たちを可哀想な物でも見るような目

を向けてくる。

・・・そんなことしてるより早くクーラーの効いた教室に行けばいいのに。

「あゝ、生き返るゝ」

「大袈裟なやつだなー」

そう言いながらもライラも満更ではなさそうだ。

場所は教室。

あれからあーだこーだ言い合いながらもようやく到着して、今は涼しい教室でくつろいでいるところだ。

「しかし、あの波風に勝っちまうとはなー」

「またその話か・・・」

げんなりしながら机に突っ伏す。あー、机が冷たくて気持ちいい。

昨日はそのことについて鬱陶しいくらいに聞かれ、そのたびに誤魔

化してきたのに。

「昨日も言ったが、あいつとは古い付き合いなんだから行動パターンはある程度わかるんだよ。そのせいだ」

「いや、それでもすげーよ。あいつに勝てるやつなんて同学年に5人いるかいなかだしな」

「わかった、わかったから」

俺としてはあいつに勝てるやつがこの都市に5人もいることが驚きなんだが。

「そついや一年だけトーナメントするってことは上級生はどうすんだ？この都市の一年生っていったらそれだけでアリーナ全部使っちゃうんじゃないの？」

そんな疑問が頭をよぎったので取り敢えず聞いてみる。

「あー、お前って転校生だったな。あんまり馴染みすぎてるからついこの前転入してきたことなんて忘れてたぜ。」

む、どういう意味だ？

「上級生の話だったな。俺もあんま知らないんだけどさ、二年生からは定期的に集団演習つてのがあらしいんだよ。それって魔獣指定区域に行って実際に魔獣と戦ってみるっていう危ない授業でさ、単独じゃ危険だから二、三年混合でチーム組むらしい。有望な生徒をスカウトするための品定めするとかどうとかじゃないか？」

「へー、意外と面白そうな授業あるんだな」

魔獣ってのは人間が魔法を使えるようになったときにいきなり現れだした生物のことだ。性格は大体のやつが好戦的。外見がうさぎみたいな魔獣でも熊を食ったりするぐらい怖いし強い。

魔獣指定区域ってのは魔獣が集団で生息してる場所のこと。一般人は立ち入り禁止になっている上に、その近辺10km範囲に住み着くことは法律で堅く禁じられている。

ちなみに召還術師はその魔獣を手懐けて戦わせる術師のことだ。

俺も任務でたまに指定区域に入って行って適当に数減らしてたな、などとどうでもいいことを考えていると、ふと疑問が浮かんだ。

「ん？それじゃあ三年は関係無いんじゃないのか？俺たちが二年に入るころには卒業してるわけだし」

「いや、そうでもないんだな、これが」

「は？なんで？」

今言ったことなら俺たちがその集団演習ってのをやるのは二年生からのはずだ。

そうじゃない？

頭に浮かぶ疑問が泡のように浮いてははじけ、また浮いてははじけていく。

「なんでも“推薦枠”ってのがあるらしい」
「推薦枠？」

なんじゃそりゃ？

「一年のトーナメントで十位以内に入って、どっかのチームリーダーに推薦してもらえればそのチームに入れるんだと。だから三年も観戦しにくるみたいだぜ」

「ふーん。じゃあ紅葉もその集団演習つてのやったことあんのか？」

俺が問うとライラが首を振る。

「さっき言っただけど一年だけだ。中学の時は含まれねーよ」

「あー、なるほどな」

じゃあ無理だわな。

いくら強くても経験の無い子供が魔獣と殺り合ったら命を落とし兼ねない。

紅葉が普通の魔獣と戦って死ぬとは思えないが、何が起っても取り替えしがないのが魔獣指定区域だ。

内心でその校則を作った人に感謝していると、ライラが思い出したように呟きだした。

「・・・そう言えば去年その校則について一騒動あったっけな」

「騒動？」

「あつたわね、そんなこと」

いきなり後ろから声をかけられて心臓が飛び出しかけたが、なんとか表情に出さないように自制できた。

後ろを振り向くと、今日はその長い黒髪を後ろで纏めた紅葉が立っていた。

「おはよう、紅葉。で、何があつたって？」

「おはよ。なんか去年中3の一位になった子を自分のチームに入れて
させてくれ、て言い出すリーダーたちが沢山いて、まあ結局無理だ
ったんだけど」

「へー、確かレア持ちなんだっけ？」

レア持ちっていうのは伝説武器保持者の略称のことだ。他にも伝説
武器をレア武器、と言ったりする。

「そうそう。確かにあの子ぐらいのレベルなら三年にもそうはいな
いと思う」

「へー、そんなにか」

そんな奴保持者にいたっけ？

一人だけ思い浮かぶんだが、あいつは軍隊所属のはずだしなー。

あ、でももう一人いるにはいるんだが、やっぱないな。

「まあ伝説武器保持者ってこの都市に4人もいるんだけどさ、やつ
は自分のチームにほしいつてもあるんだろっな」

「へー、そんなにいんのか」

すみません、5人です。

しかし俺のけて4人ねー。何人が会ったことありそうだが、自分か
ら会いに行く気なんてさらさらないので取り敢えずスルー！。

そうこうしているとHRの時間がやってきた。ミレア先生の話が終
わり、授業が始まる。

集団演習。

推薦枠。

そんな単語が頭の中を蹂躪して、授業なんて身が入らない。
単位のためとか思ってたけど、とんだびっくりイベントがあったもんだな。

つい頬が緩む。

これから楽しくなりそうだ。

episode 11 コーチ

「私に魔法を教えてくださいっ!」

「……はい?」

昼休み。

今日もライラたちと学食かあ、などと呑気に立ち上がった俺はいきなり目の前の少女に頭を下げられた。

えーっと、かわいい子だな。

いや、そうじゃないだろ!!

今この子はなんて言った!?

魔法を教える!?!なんで!?

そもそも誰!?

このクラスじゃないよね!?

その前になんで俺!?

噴水のごとく沸いてくる疑問に混乱していると、目の前の少女が顔を上げる。

鮮やかな青色の長髪、女性として平均的な慎重に端正な顔立ち。その瞳は真剣に俺を見つめていた。

「あ、申し遅れました。第11高校一年B組の早川綾芽はやかわ あやめと言います」

ほう、お隣さんか（悠希たちはC組）。などと思当はずれなけとを思ってしまったのは混乱しているからだ。そうだと願いたい。

「えっと、じゃあ早川さん」

「綾芽でいいですよ」

なんだかペースを掴みにくいな、この子。

「じゃあ、綾芽さん。取り敢えずなんで俺に？」

まず当たり触りの無いところ攻めていこう。うん、それがいい。

「はいっ！華瀬さんが学年6位の波風さんにあっさり勝ったと、友達に聞いたので」

「うん、その友達連れてこようか。でないと俺が殺される」

後ろからとてつもない殺気を感じるんですが、まさか紅葉さんじゃありませんよね？怖いから確認しないけど。

冷や汗がだらだら流れてくる俺の心情などつゆ知らず、話を続ける綾芽さん。

「それに華瀬さんって、英雄の『華瀬悠希』と同姓同名じゃないですか、そんな人に教えて貰うなんてちょっといいかな、って」

ビクウツ！！

いきなり笑顔でそんな爆弾を投下してきた。

心臓が飛び出すかと思う程の衝撃に、俺と紅葉は引きつった笑みを浮かべる。

「はははははー、同姓同名ってただだよー。そんなことないってー」

「そ、そうよ。あはははー」

俺も紅葉もこの際若干カタコトなのは仕方がない。

俺たちは今爆弾処理の最中なのだからそんなことに変わってなどいられるかつ。

ひとまず念話で作戦会議。

『まずくない？』

『非常にまずいな』

『どうする？』

『どうしようか』

やばい何も決まらない。

焦る俺たち。

そんな中、案外直ぐにことはすんだ。

「まあ、そうですねー。でも華瀬さんに教えて貰いたいっての冗談なんかじゃ無いんですよ？」

き、きたあー！！！！これだー！！！！

「う、うん。まあいいよ」

それぐらいでこの話がスルーされるなら安いものだ。

「本当ですか！？ありがとうございますっ！！」

「いやいや、こちらこそありがとう」

逸らされてくれて。

俺の最後の言葉に首を傾げる綾芽さんだったが、直ぐにそんなこと忘れて上機嫌で教室を出て行った。

「・・・・・・これが日本でいう嵐が過ぎたってやつか？」

「ああ、そんなとこだ」

ぐったりとうなだれる俺と紅葉。

訝しく見つめてくるライラだったが、すぐに興味を逸らして時計を見る。それに俺たちもつられる。

桜も待たせてることだし昼飯行かねーとな。

放課後。

俺はアリーナへ来ていた。もちろん綾芽さんの特訓のためである。トーナメントの近いこの時期はアリーナが一般開放されているため

生徒たちも自由に使える。既にアリーナにはチラホラ人影があり、皆技や魔法を磨くために努力を積み重ねている。

いいねー、若いつて。

年寄りくさい思考を振り払い、待ち合わせの人物を待つ。

・・・遅いつ!!!!

HRが終わってももう1時間は立っているはずだ。長引いたとしても大分前についても可笑しくないはずだ。

迷った? いやまさか!。

「すみませーん!!」

そんなことを思っていると、目的の人物が現れた。

「待ちました?」

「うん、すごく」

ドラマみたいに「いや、今来たところ」なんて言う筈もない。そんな俺の態度にしきりに頭を下げる綾芽さん。

「す、すみませんっ！！その、迷ってしまっ」

「……………まじで？」

先ほどのバカみたいな予想がなんと当たってしまっていた賞金とか貰えないかな？

「いや、頭上げて。そろそろ始めないと日が暮れるから」

「は、はい！！すみませんっ！！」

いや、だから……………まあいいか。

俺の言葉にもう一度深く深く頭を下げ、目を瞑る。

「ジエネレート」

綾芽さんが呟くと手に光が集まる。実戦では目を瞑っての武装展開なんてできないが、学校の模擬戦なんかでは展開まで相手が待つてくれるので、集中しやすくするために目を瞑って行う人も少なくない。

やがて光が散り、彼女の手にメートルほどの杖が現れた。

「特化型ねー」

魔力保有量が多い魔術師などに良く使われる魔法オンリーの補助武装だ。

なるほど、と頷いていた俺だったが、次の瞬間には啞然とさせられた。

「おいで、クウ」

彼女が呟くと今度は空中に魔法陣が浮かび上がる。
その中から水色の少女の妖精が現れたのだ。

「せ、精霊術師っ!?」

さっきの魔法陣。あれは召還術師や精霊術師が魔獣、精霊を呼び出すために展開する物だ。別にそこまで珍しいものではない。だが問題があった。

「なんで俺に教えてもらおうと思ったんだっけ？」

「え？友達が華瀬さんの魔法がすごいって言ってたからですけど？」

はあ、この子はほんとに確信犯なんだか天然なんだか。

「確認のために聞くけど、魔術師と精霊術師だと魔法の発動の仕方が違うって知ってる？」

「え!? そうなんですか!？」

やっぱりか……………。

「いいか？魔術師は自分の魔力を補助武装に組み込まれた術式に流し込んで発動させるのに対して、精霊魔法は魔力を補助武装に流し込んで術式を展開、そして精霊が補助武装に魔力を流し込んで発動するという手順が必要なんだよ。精霊と同じ属性のしか使えないけど、その分精霊魔法は少量の魔力でも威力が強いつてわけだ」

「そ、そうだったんですか……」

なんでそんなことも知らないのだろう。こんなの学園都市の小学校で教えられただろうに。

「その、私勉強苦手で。成績もいつも下の方で」

そんな俺の疑問を察したのか、苦笑いをしながら言ってくる。上目遣いが妙にかわいらしい。

「……まあいいか。そのかわり役にたつかわからないぞ」
「はいっ！お願いしますっ！」

満面の笑顔を向けてくる綾芽さんに毒気を抜かれた俺は、これから彼女に魔法を教えることになってしまった。

この日はアリーナが閉まるギリギリの時間まで行われたのだった。

トーナメントまで後三日。

episode 11 コーチ（後書き）

感想お待ちします。

episode 12 英雄の肩書き

“英雄”

その肩書きは嫌いだった。

ただ怒りに身を任せて殺戮の限りを繰り返していただけなのに、後々そんな風に呼ばれ出した。

呼ばれる度に「人殺し」と罵倒されている気がしてならない。事実向こうの国ではそう呼ばれているだろう。

別にそのことに後悔しているわけではない。

ただそう感じるというだけだ。

だからその肩書きが“英雄”から“犯罪者”に変わったところで何も感じない。

だがなんだろうこのやり場の無い気持ちは。

矛盾している。

何も感じないはずなのに苛立ちを隠せないでいる。

そんな自分がただやるせなくて、情けなくて。

俺はただ心の中で叫び続けることしかできなかった。

7月18日木曜日。

今日も暑い中蟻たち（俺たち）はせっせと巣穴（教室）に餌（教材）

を運んでいた。
なぜこうなったのか改めて振り返ることにしよう。

数分前。

「あら、いいところに」

そんなミレア先生の第一声には嫌な予感しかなかった。

「どうしたんすか、先生？」

おい、ばかやろう。

この選択肢は黙って通り過ぎるしかないだろうっ
いやだよ、絶対嫌なことしかおこらないよ、今死刑宣告待つ囚人の
気持ちだよ。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど」
そらきたぞ。

「もちろん慎んでおう——」
「辞退させて頂きます」

何か勝手に承諾しそうになったバカがいたので変わりに断っておい

た。

「何言つてんだ！？ミレア先生の頼みだぞ！？」

「お前こそ考えて見ろっ！！相手はあのミレア先生だぞ！？」

睨み合う俺たち二人。

やがてどちらからでもなく――。

「「じゃんけん――」」

「なんであの時に俺はパーを・・・」

自分の手が恨めしい。

そんな出来事があり、現在教材室から次の魔術学の授業に使う教材を運びに行くところだ。

教材室は校舎の隣に位置するため、屋外を通らなければならないのだ。

「なんでここだけ校舎と別なんだよ」

「魔法に使う教材なんて幾らでもあるからな。量てきに校舎内だと

入りきらないんだと、ほっ」

頼まれた教材を抱え、俺たちは来た道に戻る。

「なー、これ終わったらジューズ奢って。てか奢れハゲ」

「なんで俺が奢んなきゃなんたいんだっ！？てかハゲてねーよ！！」

「え？気づいてないの？頭頂部の頭皮が若干……」

「マジで！？やばい！！どうしよう！？」

「正常なままだった」

「悠希っ！！！」

しょーもないことで笑い合い、道も半ばまできた。

もう少しで着く。

そんなことを思っていると突如耳元で誰かが囁いた。

ゾクッ！！

ゾツとするような冷たい声、背筋に途轍もない寒気を感じ、反射的に振り向く。

だが、そこには何もない道がただ延びているだけだった。

気のせいかな？

いや、そんなはずはない。

あの背筋に走った戦慄は本物だったはずだ。

ならば十中八九、死霊術師の“ネクロマンサー隠蔽”ハイドの魔法だろう。

だが問題は普通の死霊術師の“隠蔽”で俺が気づかないはずがないということだ。

「ん？どうした悠希？」

「……なんでもない」

訝しげな顔で俺の顔を覗き込むライラにそう答え、再び歩みを進める。

あの凍るような冷たい声音。どこかで聞いたことがある。

この都市の住民、もしくはここに侵入でき、俺の背後を取れるほどの実力者で、なおかつ幻術などに長けている死霊術師。

（あいつ……いや、そんなはず……）

頭を振り、その考え否定しようとする。だが、頭の中にへばりついたまま中々消えてはくれない。

さっきのあの言葉が心の中に居座り続け、心に暗い影を落とす。

とりあえず手に持った教材を教室に運ぶ当初の目的を遂行するために足を動かす。

——背後に気をつけてください。

未だに耳に残るその言葉と冷たさから逃げるように俺その場を後にした。

5 限目、死霊学。

この時間は死霊術師の特徴などについての授業だ。

死霊学講師のデミス・クリア先生が、仏頂面のまま教科書を読み上げている。

普段なら寝て過ごすのだが、今の俺には死霊術師は特別な意味合いを持つ。

「死霊術師は自身の姿を隠した隠密行動を得意とする術師だ。幻術で身を隠し、ある時は魔法、ある時は武器で、またある時は使い魔で相手に襲いかかる」

普通の術師にも魔獣を手懐けて使い魔とするものはいる。ただ、召還術師と違うところはそれ自体で戦うか、あくまでサポートをさせるか、それに使い魔の数などもある。使い魔を手懐けるにはそれなりのセンスと知識がいる。そのため召還術師の使い魔の数の平均は15.3、それに対して他の術師は0.4。この統計から見てもわかる通り他の術師だと極端に少ない。

そんな中でも死霊術師の中では使い魔を所持しているものは多い。理由としては自分の身代わり、もしくはさっき先生が言ったように

死角からの先生攻撃などが挙げられる。

「もう一つ彼らには特殊な魔法がある。それが“傀儡”^{くぐつ}だ。無系統魔法に属するこの魔法は、ある程度の質量の物体を自由に動かせる。死霊術師が戦場でこそ、その真価を発揮できるのは動かせる物、要は死体が沢山あるからだ」

そのことを聞いた生徒はみな顰めつ面をしだす。女子の中では顔を青白くさせている人もちらほら。

無系統魔法、または解析不能の能力。
インヒジフル・アビリティ

解析不能の名前の通り、現代の科学では解明できない魔法のことだ。その人が生まれたときから潜在的に持っている固有魔法や、伝説武器の特殊性についてもこれが言える。

その中でも“傀儡”は固有魔法に含まれる魔法だ。

そんなことは実戦でなんども見てきたことだし、普段ならこの授業も退屈だと感じるのだが、今朝のことが未だに頭から離れずについて聞き入ってしまった。

我ながらどうかしてる。

内心で苦笑しながら意識を思考に落とす。

今朝のあいつ死霊術師だった、それは間違いない。
だが普通の学生でも無いだろう。でなければ気づかないはずがない。

俺の頭の中では半ば誰なのか結論がでている。

だがまだ確証がない。

だがもしあいつならなんの目的も無しに俺に接触する筈がない。

じゃあなんの用で？

俺が犯罪をおこしたからか？

でもそれだけでわざわざあいつが出向く玉か？

頭がオーバーヒートしそうな程の疑問を処理していると、ふとある考えが頭をよぎった。

わからないなら直接本人に聞き出せばいい。

そんな元も子もないことなのだが、なんとなくあいつがいそうな場所に心当たりがあった。

取り敢えず頭の中で予定を組み立てる。

そうこうしている内に授業が終わりへと近づいていった。

前ではライラがいびきをかきながら爆睡。
隣ではせつせと鉛筆を動かしている紅葉。
そんな二人をぼんやり眺めながら授業が終わるのを今か今かと待つ
ていた。

e p i s o d e 1 2 英雄の肩書き（後書き）

感想よろしくお願いします。

episode 13 死神との約束

「2日間ありがとうございましたっ!!」

目の前で深々と頭を下げる綾芽さんに、どうしたものかと苦笑いしながら考える俺。

今は7時半少し前。

今日も彼女の指導をして、アリーナの閉館時間ギリギリに切り上げて寮へ帰っているところである。

明日はアリーナが整備で使えないため、明日の特訓も無くなり、自動的に今日までとなったのだ。

「そんなに畏まらなくなっただけいいって。たった2日間しか教えられなかったし、俺も精霊魔法を直に見られて参考になってるから」

思ってもいないことを口にした。

精霊魔法を参考にどうかいうレベルはとくに卒業しているし、他国の軍隊と合同で任務に当たっていたこともあって熟練した精霊術師を目の当たりにしたこともあるので今更参考にはならない。

「そうなんですか。それなら良かったです!」

満面の笑顔を向けてくる彼女に心が痛む。

纏わりつく罪悪感に気付かれないよう俺も笑顔を向ける。

「それじゃ俺こっちだから」

「え？寮はこつちですよ？」

首を傾げる綾芽さん。

「ああ、ちよつと用があるから」

「そうなんですか？なら門限に遅れないようにしてくださいね。寮長の説教がこれまた長いんです」

忠告してくれる彼女に「努力する」と手を振り寮とは別の方向へ向かう。

「……ジエネレート」

彼女が見えなくなったところで呟く。手首に光が纏わりつき、ブレスレット型の補助武装が現れた。

特化型だ。

補助武装を複数持つやつは少数ながらいると前に話したと思うが、俺はその中でも一際多い。

マジック・トレース
瞬間展開なんていうチートな技を使えるのでタイムラグ無しに武器を持ち替えられるからだ。

だが特化型と武器型を同時に使いこなせるやつは極稀だ。

理由は三つある。

一つは魔法を並立発動出来る者が少ないということ。
簡単に言つと魔法を発動させる手順を同時に複数も出来る人間は限

られているということだ。

二つ目は補助武装はその構造上常に魔力が流れる仕組みになっていること。

特化型と武器型では構造が異なるため、流す魔力も別々に流さなくてはならない。

最後は魔力の消費が凄まじい割に発動するまでの時間が長いということ。

当然のことながら一つのコップに水を入れるのと2つのコップに同時に水を入れるのでは2つの方が量も時間もかかる。

魔力もそのことが言えるわけだ。

だから特化型と武器型2つを持つ奴はほとんどいない。

俺はその三つ全て問題無く使えるので、大丈夫なのだが。

魔力を流し込み、術式を展開。

魔法が発動し、俺の周りを風が覆う。突如足が地面から離れ、俺の体上昇していった。

風属性の“浮遊”という魔法だ。

これまた魔力消費が激しい高等魔法を使って移動することにしたのだ。

俺はそのまま歩いてきた方向とは反対——つまり学校へと向かった。

流石に薄暗い空に点のように浮かぶ俺に気づくやつなどいないだろうと思った矢先に不穏な視線を感じた。

「……ビンゴ」

学校まで残り1kmぐらいの距離でこの射抜くような視線を感じるということは、俺の予想が的中していることを伝えていた。

屋上にゆっくり着地すると、そいつは突然現れた。いや、元からいたのだろうが“^{ハイド}隠蔽”の魔法を使っていたのだ。

目に映るのはプラチナブロンドの髪を短く切った俺と同じ歳なのだが、そうは思えない小柄な美少女だった。だが、その少女の顔はおおよそ感情というものが抜け落ちたように感じるほど無表情なものだった。

そんな中金色の瞳だけが俺を射るような視線を投げかけてくる。

「お久しぶりです“テュラン”さん。よくここがわかりましたね」「やっぱり“トート”だったか。別に、ただの感だよ」

“死神”^{トート}の2つ名を持つ彼女はニコラ・ベール。俺がドイツ軍との合同任務で出会ったドイツ軍所属の死霊術師^{ネクロマンサー}だ。（ちなみに“テュラン”ってのはドイツ語で暴君って意味なんだとか。つけたやつに抗議したい）

「それで、どうしてここに来たんだ？」

改めての問い。だが予想通りの答えが返ってきた。

「あなたを抹殺するように命令を受けました」

「あー……やっぱりか」

予想していたとはいえ実際に口にされると結構辛いな。頭をガシガシ搔いていると、ある疑問が沸いてきた。

「じゃあなんであの時殺らなかったんだ？あの時以外でも殺す機会なんていくらでもあっただろ？」

あの時とは今朝の教材を運んでいたときのことだ。思えばあの時以外にも隙なんていくらでもあったはずだ。当然の疑問に、しかし全く別の答えが返ってきた。

「私も明日からこの高校に転入することになりました。既に書類は提出しています」

「はい？」

抑揚の無い声でそう言うニコルに対してわけがわからず混乱する俺。そんなことなどお構いなしに彼女は続ける。

「明後日のトーナメントには出場できるそうです」
「は？」

全く意味の解らない言葉を紡ぎ出すニコラの顔から思考を読もうとするが、無表情の彼女からそんなことは無駄とすぐに諦めた。
首を傾げる俺に、彼女は更に意味の解らないことを言い出した。

「そこで私と戦ってください」
「……………は？」

さつきから「は？」しか言っていないな、俺。

いやいや待て待て！！
何考えてんだよこいつ。

全く表情を動かさないこいつに探り合いで勝てるはずもなく、取り
敢えず思いついたことを問う。

「……………えーつと……………なんで？」
「あなたには前に一度負けましたから」
「は？」

あれ？俺、こいつとやり合ったことあったっけ？
いくら記憶を辿っても思え出せない。そんな俺を見て察したのかニ
コラが続ける。

「第六次世界大戦の時です」
「……………」

その言葉に顔をしかてしまう。

忘れていたのに忘れられない単語。

俺の心に穴を空けた出来事。

俺が英雄なんて欲しくもない栄光を得た戦い。

七年前。

当時最強の軍事国家であるロシアが中国に侵攻したことが引き金となり、世界中を巻き込んだ大戦争。

およそ二年間で一旦休戦になり、今現在も冷戦状態が続いている。

頭の中でズキズキ痛む何かを抑えながら、言葉を紡ぎ出す。

「お前も“あれ”に参加してたのか？まだ10年ってなかったろ？」

「あなたにだけは言われたくありません」

即座に無表情で言い返してきたニコラに思わず苦笑いを浮かべる。
だが、それでもおかしい。

「あの時はヨーロッパと極東、あとアメリカは軍事同盟を結んでいたはずだ。ドイツもその中に含まれていたはずだろ？」

強大な戦力を誇るロシアに対抗するためにすぐさま各国が軍事同盟を結んだ。

それでも今は休戦状態に持ち込んだだけなのだ。

首を傾げる俺に、ニコラはコクリと頷く。

「そうです。私は実際にはあなたとは戦っていません」

「どういうことだ？」

わけがわからん。

こいつは何が言いたいんだ？

もう今日何個目かの疑問符を浮かべていると、急にニコラが押し黙った。

重苦しい沈黙が数瞬流れたが、彼女は口を開いた。

「あなたは私の獲物を横から奪い取りました」

……………あれ？そんなことあったっけ？

「私は当時には伝説武器を所持していましたが、そんなときに初めて伝説武器所持者と戦いました。ですが苦戦してしまっていたところをあなたが乱入してきて一瞬で終わらせてしまったんです」

……………あ。

「……………もしかして弓使いの女か？」

コクリと頷くニコラ。

あー、思い出した。

確か開戦から一年ぐらい経ったときだっただろうか。

まだそのときは暴走していなかった頃なのでよく覚えている。

だが、あの時は――。

「……………女の子が襲われてると思ってたぞ」

あんなところに子供がいたら普通逃げ遅れたって思うだろ。

俺もなんとか間違えられてその度に居心地の悪い思いをしたものだ。

そんな感慨に捕らわれていると、ようやく話が見えてきた。

「つまりあの時自分が倒せなかった相手を俺が倒したのが悔しいと？」

コクリ。

再び頷いた。

こいつ見かけによらず負けず嫌いなんだな、きつと。
けどなあ。

「なんでわざわざトーナメントなんだ？」

当然の疑問。だが、

「他のところだと狭すぎます」

「あーなるほど」

こんなところでレア持ち二人がやり合ったらとんでもない大惨事になりかねない。

でも俺に何のメリットがある？

「あなたが私に勝った場合、軍には私から命令の中止を要求します。
もし拒否されても私が軍を辞めればすむ話です」

「は！？」

何をいきなり言い出すんだこいつは。

俺の心情を察したのだろうニコラがそんなことを言い出した。
俺としては嬉しいのだが。

「……お前はそれでいいのか？」

「はい。これは私の意志です。それに私は他の保持者たちと同じように祖国への執着はありませんので」

即答でそう言い切るニコラ。

伝説武器所持者はどういうわけか自国への執着心が薄い。もちろんそうじゃないやつもいるが、基本的に保持者たちは自分の欲求を優先させるのだ。

「そうか、なら俺も遠慮せずに済むな」

「伝説武器を使いたくないなら使わなくてもいいです。勝てる自信があればですけど」

うつ、読まれてる。

こいつもしかして精神干涉の固有魔法でももっているのではなからうか。もしそうなら今世紀二人目の発言者だな。

「では私はこれで。また明日お会いしましょう“テュラン”さん」
「ああ」

突如彼女の身体が霞む。

“隠蔽”の魔法を使ったのだろっ。
そこで俺はあることに気づいた。

「これからは“テュラン”は止める。恥ずかしい」

「ではなんと？」

「好きに呼んでいい」

もうすでに彼女の姿は見えなくなってしまったが、顎に手を当てて悩

んでいるのがわかった。

「では悠希さん、と。私のこともニコルで構いません」
「わかった」

“ニコル”という愛称で呼ぶことを認めてくれたって事は少しは距離が縮まったかな？

気配も感じられなくなった彼女にそんなことを思い、少し嬉しくも感じた。

このときには門限を過ぎていることにまったく気づいてなかったのだった。

トーナメントまで後2日。

episode 14 心の弱さ

「ニコラ・ベールです。よろしく願いします」

抑揚の無い声で無表情な美少女がそう言うと、クラス中が沸いた。盛り上がるクラスメートとは裏腹に、俺は顎が机につくかというぐらい口を開けて呆然としていた。

俺の前と左、つまりライラと紅葉が首を傾げながら俺を見ている。

何が起こったかと言うと、ニコルが転入してきたのだ。しかも俺のクラスに。

ふと昨夜の彼女の言葉が頭をよぎる。

『また明日お会いしましょう』

……………。

あいつ知ってやがったなっ！！！！

せめて心の準備ぐらいさせてほしい。

恨めしく睨みつけると、クラスメートの熱狂（男子女子両方）を受けながらも無表情のニコルは唐突に俺へと目を向けた。視線と視線が交わる。

「先生。あそこの席に座ってもよろしいでしょうか？」

ニコルが指差したのは俺の後ろ。

クラス中が静まり返り、俺を凝視する。

だが口を開けて呆然としている俺の意識には入らない。

「はい、いいですよ」

絶対面白がっているミレア先生が頷くと、スタスタとこっちに向かってくる。すると彼女は俺で足を止めた。

「おはようございます悠希さん。昨晚からまだそんなに経っていませんが、今日も1日よろしくおねがいします」

そう言つてぺこりと頭を下げる。

ニコルのこの発言でクラス中から悲鳴なんだか歓喜なんだかよくわからない叫びが上がった。

いきなり何言い出すんだこいつはっ!?

「ゆづき……」

「……ゆづ、昨晚何があつたの?」

「違う!! 激しく誤解している!!!!」

ライラと紅葉が俺を疑わしげな視線で見つめてくる。

本当に違うんだーっ!!!!

それから誤解を解くのに1限目の魔術学を丸々使ってしまった。

元凶であるニコルは無表情のまま首を傾げるだけなのだから余計な
ちが悪い。

明日はトーナメントのため、授業は午前中だけとなった。今日は整備のためアリーナも使えず、特訓もできないので俺の部屋はライラ、紅葉、桜、綾芽さん、ニコルの6人が集まって少々狭く感じてしまう。

「なんで俺の部屋に集まるんだろう？」

「さあ？」

俺の素朴な疑問に曖昧に答えたのはライラだ。

「男の子の部屋に入るのって初めてだから緊張しますう」

「ここが悠希さんの部屋なのですね。綺麗に整理整頓されています」

初めて来た二人（前者が綾芽さんで後者がニコル）は物珍しげに辺りを見回す。

「お兄ちゃんって昔から几帳面だもんね」

ニコルの言葉に桜が頷く。

「別に几帳面ってわけじゃない。ただ汚いと落ち着かないだけだ」

「世間一般ではそれを几帳面と言います」

ニコルの厳しいツツコミ。

心なしかいつもより表情が和らいでいるような……いやわかんね。

それからくだらないことなどで盛り上がっていると、ライラが思い出したように口を開いた。

「そういえばさ、ニコラちゃんはトーナメントに出られんのか？」

「あー、そうね。なんてったってトーナメントの1日前だし」

それに紅葉も便乗する。もっともな意見だがニコルは首を縦に振った。

「ミレア先生に聞いたところ、トーナメント表に組み込んでいただけるようです」

「そうなんですか。がんばってくださいね、ニコラさん」

笑顔で応援する桜にコクリと頷くニコル。

『で、この子はどいつだった知り合いなの？』

突然頭に紅葉の声が響いてくる。念話だ。

『だからそんな関係じゃ——』

『そうじゃなくて』

俺の言葉を遮り、真剣身を帯びた声色が頭に響く。

『……なんのことだ？』

『とぼけないで』

誤魔化そうと試みるも、直ぐにバレてしまった。幾分か声の温度が低くなったのは気のせいではあるまい。

『弱ったねー……』

どこから話した物か。

『えつとな——』

『ただの戦友です』

観念して答えようと思った矢先、別の声が割り込んできた。驚いて辺りを見回すと、ニコルがジーっとこちらを見ていた。

『ね、念意同調！？』

隣ではこちらも驚いた紅葉が目を見開いていた。

念意同調というのは、念意による通信を傍受、または妨害するための魔法だ。

だが傍受する回線に割り込むために脳波をその回線に合わせなければならぬため、かなり難しい高等魔法に値する。

『に、ニコル……。脅かさないでくれ』

『こそそと人の秘密を話すのは感心しませんね』

『すみません……』

絶対零度の声に俺たちは消え入りそうな音量で声を飛ばした。

『先程も話した通り、私と悠希さんはただの戦友です。一年前、悠希さんはドイツ軍と合同任務を受け、私はそこで知り合いました』

六年前の出会いは意図的に避けてくれたのだろう。無表情ではあるが人の嫌がることを言わない彼女に内心で感謝を述べる。

それで満足したのか、紅葉は「そ、そういうこと」と半ば逃げるように念話を切った。

今、回線に入っているのは俺とニコルだけ。だが、妙に重苦しい沈黙がながれていた。

『ここにいる方々はみな知っているのですか？』

沈黙を破ったのはニコルだった。知っているとは俺の秘密のことだろう。

彼女の問いに他のみんなには気付かれないように小さく首を振った。

『……いや、紅葉だけだ』
『そうですか』

それだけ言い残し、ニコルも念話を切る。

さっきの話の意図はなんだったのだろうか？

ただの確認のための言葉だったのかもしれない。もしかしたら違つかもしれない。

紅葉とニコルの声が聞こえなくなった頭の中は妙に静かに感じた。

トゥルルル

ライラたちが帰ったのを見計らってシャワーを浴び、髪を拭いている所でケータイが鳴った。

ディスプレイに表示されているのは『波風一葉』の文字。

時刻を確認する。

今は夜の8時半。

こんな時間に呼び出したたらどうしたものかと冷や冷やしながら通話ボタンを押した。

「もしもし」

『あ、悠希？今ちよつといいかしら？』

案の定電話越しから一葉の優しい声が響いてきた。

「ああ、できれば外出はやめてほしい」

『安心なさい。今日は電話で済みますから』

その言葉を聞いた瞬間内心で安堵する。だが、続けられた言葉は安堵とは程遠かった。

『あんたの濡れ衣の件だけど、やっぱり少し可笑しなところがあるのよね』

「おい……」

『違法なことはやってないから問題ナッシング』

真面目な話もこいつが話すと緊張感なくなるな、このやろう。
俺の考えを即座に否定して言葉を続ける。

『魔力の痕跡が見つからなかったみたいなのよね、見つかったのは殺された術師の物だけ。普通なら武装展開しただけで痕跡は残るはずなんだけどね。一つを除いて』

「……伝説武器保持者が絡んでるって？」

普通の補助武装は展開の際に魔力を撒き散らすように具現化させる。だが伝説武器は魔力を発散させずに具現化するのだが、未だにどういうメカニズムで具現化されるのはわかっていない。

俺の推測を肯定するように一葉は話を続ける。

『そう。で、被害者の傷口から推測すると武器は刀じゃなくて剣なんだって。刃渡りはどれくらいかわからないけど』

「日本が保持している伝説武器の中で剣は二つ。俺の“ファランクス”と“デュランダル”だけ、ってことか」

伝説武器、それも剣の類となればある程度は絞り込める。

アメリカの“エクスカリバー”に“テストロス”、イギリスの“メルフェス”、中国の“スサノオ”そして――。

「――ッ！――ロシアの“ガラドボルグ”！――」

『そう、私は全部ロシアの自作自演だと思う』

その瞬間“やつ”の歪んだ笑みを思い出してしまう。それと同時に吐き気がこみ上げてきた。

悲しみ、怒り、恨み、憎悪、様々な負の感情に押しつぶされそうな胃を抑え、なんとか耐える。

『……大丈夫？』

ようやく落ち着いたところに一葉の心配気な声が響いてきた。

「ああ、悪い。でもやつが関わってるなら、もう一葉は心配しなくていい」

『なんでもかんでも一人で背負い込むのは悪い癖』

一葉の真剣な声に思わず苦笑を漏らす。

「そうだったな」

『わかればいいの。それじゃおやすみ。明日はがんばってね』

「ああ」

電話を切ると、堪えきれなくなった吐き気と共にそのまま洗面所に駆け込む。

「うっ」

我慢しきれず胃の中の物を吐き出す。何度も何度も。

「はあはあ……くそっ！！！」

あいつを思い出ただけで嘔吐する自分の弱さに反吐がでる。

擦り切れるような痛みをあげる胃を俺は思いっきり殴りつけた。

「っっっ！」

痛みで床につずくまってしまう。

そんな自分につんざりしながら瞼を閉じた。

こんなんでニコルに勝てるのか？

頭をよぎるそんな疑問も、今はどうでもよく感じてしまう。

俺はそのまま意識を手放した。

episode 15 沈みかける意識

ドンドン。

ドアを叩く音で俺は目を覚ました。

ドンドン。

喧しい音が部屋を包む。

「おい悠希、早く起きろ」

「ゆうー、集合に遅れるよー」

この声はライラと紅葉か。

今何時だろう？

時間を確かめたいが、身体がすごくだるい。

「お兄ちゃん？早くー」

「悠希さーん。私たちまで遅刻しちゃいますう」

桜と綾芽さんが催促する。

「ゆう？入るわよ？」

ガチャリと扉が開く音がした。それと同時に4人分の足音がこちらへ向かってくる。

一人足りない気がしたが、それはニコルの物だろう。

「——ッ！？おい、どうした悠希っ！？」

角に差し掛かったところで俺が床に倒れていることに気が付いたのだろう。4人が駆け寄ってくる。すると綾芽さんが俺の額に手をやった。ひんやりとされていて気持ちいい。

「す、すごい熱ですよ！？」

彼女の言葉に全員の顔色が青くなる。だが今はそんなことどうでもいい。

「……ライラ、今何時だ？」

「まさか出るつもりなのか！？やめとけて！！」

「何時かって聞いてんだよ」

「ッ！！」

幾分凄みを聞かせた声を投げかける。そんな俺に吞まれたのか、ライラはポツリと呟いた。

「……7時57分だ」

「開会式は？」

「……………8時半」

それだけ聞き出すとヨロヨロと立ち上がる。

「ちょっとお兄ちゃん！？そんなふらふらなのに本当に出場するの！？」

心配気に見つめてくる桜。見ると他のみんなも同じ様な視線を投げかけていた。

無理矢理笑顔を作り、桜の頭にポンつと手を乗せる。

「心配しなくても大丈夫だって。そのうち治る。ちょっと準備に手間取るから先に行つててくれ。確か集合はうちの高校のアリーナだったよな？」

「あ、ああ……」

それでも動く気配の無いみんなに、どうしたものかと重たい頭で考えようとすると、紅葉が先に口を開いた。

「行きましょう。ここに居てもゆうが気を使っただけだもの」

「……わかった」

そう言つとそれぞれ部屋を出て行く。

最後に部屋を出て行こうとする紅葉が、ふと足を止めた。

「……絶対来なきゃ許さないから」

「俺が嘘付いたことなんかあったか？」

「……………バカ」

最後に軽口を言つと、紅葉が何か言つたような気がした。だが考えるよりもぐらつきかける身体を支えなければならなくなり、そんな暇も無かった。

体内に魔力を循環させ、筋肉の代わりに魔力で身体を動かす。自分を一つの機械として扱うイメージだ。

俺はその状態でクローゼットにある制服に着替え始めた。

寮を出たときには既に開会式まで15分を切っていた。走らないと間に合わないだろう。だが、

「ジェネレート」

ブレスレット型の特化型補助武装を呼び出し、魔力を流し込んで、術式を発動させる。

この前と同じ“浮遊”の魔法を使って俺はアリーナへ一直線に飛んでいった。

およそ五分で到着し、近くの茂みに着地する。

もう何をするにしても億劫だ。だがこんなことで諦めていたら一生あの男に屈するような気がしてしまう。

それだけは絶対ごめんだ。

ふらつく身体に鞭を打って、アリーナの中へ入っていく。

中には第11高校の一年生だけで埋め尽くされていた。
これの26倍の生徒数か。
そりゃすごい。

取りあえずCクラスの場所を探す。今日は常に行くことになった身体強化で視力を上げる。辺りを見回すとすぐに紅葉たちを見つけることができた。

「すまん、遅れた」

うまく回ろうとしない舌までも魔力で動かす。もう自分の意志なのが魔力が意志になったのかよくわからなくなってきた。

「……本当に大丈夫なのか？」

「闘つてりゃ忘れられる」

未だに心配そうな視線を投げかけるライラに苦笑する。
すると、ある異変に気が付いた。

「ニコルはどうした？」

彼女の姿が見当たらないのだ。訝しく思って問うと、紅葉が答えた。

「さっきまで居ただけだね。先生に言ってどっか別のところに行っちゃったみたい」

「へー……」

正直ありがたかった。

今の俺の姿を見たら彼女は失望してしまうだろうな。そんな感慨に浸っているとついに関会式が始まった。

その時のことは、正直良く覚えていない。

開会式が終わったのか、気が付いたら俺は歩いていた。

ケータイを開く。

俺の最初の試合はどうやら15分後、つまり一番最初の第一試合のようだ。

場所は第6高校の第2アリーナ。

意識が無かった割にしっかりしていたらしい。

ゲートがある方角にきちんと向かっていた。

「転移、第6高校」

ゲートに付き、俺は呟く。

すると沢山の光に包まれ、次の瞬間には別の場所に立っていた。

眼前には第11高校とあまり変わらない馬鹿でかい校舎が広がっていた。

ここが第6高校か、あんまりデザインは変わらないんだな。

そんな感慨に浸りながら足を進めるが、ある疑問が過ぎる。

第2アリーナってどこ？

なにぶん初めて参加するもんだから他校のどこにアリーナがあるかなんてわからない。

取り敢えず誰かに聞こうと思い、周りを見回す。するとお喋りをしている女子生徒三人を見つけた。この子たちに聞くことにしよう。

「ちょっといいかな？」

「え？は、はいっ!？」

いきなり硬直し出す彼女たち。だがこっちとしてもあまり構ってられない余裕はない。

「第2アリーナってどこか教えてくれない？」

「は、はい!!えっと、そこを真っ直ぐ行っ……」

道を指で指しながら何故かたどしく説明しだす黒髪の少女A。
だが、

「……………ごめんさっぱり」

さっぱりわからない。

そんな俺をクスツと笑う茶髪のおっとりした少女B。

「よ、よろしければご案内しま、致しましょうか？」

何故かすごく仰々しく提案してくる金髪の少女C。

「ああ、助かる」

俺が頷くと、ガッツポーズやハイタッチを交わし出す彼女たち。訝しげに首を傾げる。

「どうかしたのか？」

「……いえっ……」

「凄く息びつたりだな」

まったくズレの無い反応。俺の素直な感想にえへへ、と照れる少女B。

「そろそろ時間無いし……いいかな？」

「……ごめんなさいっ」

と、少女C。

「あ、あの……私、春日野遥かすがのはるかっていいいます……！」

少し歩くと少女A——もといい春日野さんが少々テンパリながら名乗ってきた。

少し驚いていると、意図はわからないが同様に他の二人も便乗した

す。

「私は水谷里香^{みずたに りか}だよ。私たち三人はこの生徒なの。よろしくねえ」

「せ、セシリー・ビーンですっ！！よろ、じゃなかった！！ふつつか者ですがよろしくお願い致しますっ！！！！」

少女Bこと水谷さんと、少女Cことビーンさんも自己紹介していった。

正直俺は今凄く喋りたくない状態なのだが、女の子に名乗らせといて自分だけ名乗らないのは寝覚めが悪いだろう。

「第11高校の華瀬悠希。よろしくな」

「……え、え……っ?!?!?」「」

え、何?なんか変なこと言ってたっけ?

いきなり驚きだした彼女たちに若干後ずさると、春日野さんが目を爛々と輝かせて詰め寄ってきた。

「も、もしかして波風さんを倒したっていう最近話題の転校生さんですかっ!?!?」

た、他校にまで伝わってんの!?!?

広めたやつ出てこい。今は無理だけどミンチにしてやる。

そんな風に質問責めを受けながら歩いていくと第2アリーナに到着した。

「で、ではゆっきーさんまた」

「またねえゆつきいー。観客席で応援してるからねえ」
「が、がんばってくださいませゆつきー様」

珍妙なニツクネームで呼びながら手を振ってくる三人。この短時間でいつのまにか愛称で呼び合う仲になっていた。別にいいんだが。

さつき観客席で応援すると水谷さんが言ったが、そこまで時間を取らせるわけには……と、抗議したのだったが、頑なに首を縦に振ろうとはしなかったのだ。

諦めた俺は手を上げて応え、控え室に向かう。

控え室は思いの外広かったが、今は第一試合ということもあって中には誰もいなかった。

途中ベンチに座りたい欲求にかられかけたが、ここで座るともう立てなくなるような考えに捕らわれてしまい、結局座ることはなかった。

開始三分前の放送が鳴る。

俺は重い身体を引きずって球技場内に向かった。

episode 16 トーナメント一回戦・意地・

球技場内に上がると、観客席から歓声が湧く。だが、すでに思考さえも重たくなってきた俺には届かった。

前を見据えると誰かが立っていた。それだけしかわからない。

「君が噂の転校生か。今日は楽しませてくれよ」

もう声も出したくない。

このままぶっ倒れていたい。だが、そんな醜い醜態をさらせるわけにもいかず、ただ目の前の男を見据える。

そんな俺の態度をどう感じ取ったのか、男は舌打ちをした。

「随分生意気なんだね。上下関係つてのを教えてあげるよ。ジェネレートっ!!」

男が言い放つのと、開始前のサイレンが鳴り始めたのは同時だった。

「これより!! 第一試合華瀬悠希vsアルフレッド・ボートンの試合を始めます」

審判らしき男の声がスピーカーで増幅されて聞こえてくる。

「武装展開しなくていいのか?」

審判が問う。

だが、何を言われたのか理解できない俺は何も反応できなかった。

「そうか、では初めっ！！」

その声と同時に俺は対戦相手、アルフレッドの背後に半ば無意識で回り込んでいた。

ドサッ

会場内が静まり返る。

開始一秒も経っていないのにアルフレッドが倒れたのだ。

ぼかんとしている審判を尻目に俺は控え室へ向かう。

そんな俺の態度で我に返ったのか、彼が俺の下へ駆け寄きた。

「い、今のは何をしたんだ？」

至近距離で話しかけられたお陰で、俺に対するものと理解できた。

「別に。首筋を瞬間的に圧迫して気絶させただけです」

「ま、魔法は？」

「身体強化だけです」

愕然とする審判。

どうでもいいから早く終わらせて欲しい。

「もういいですか？」と、目で催促すると、ようやく気がついたのが再び声を上げた。

「す、すまない。勝者っ！！華瀬悠希っ！！！！」

その言葉で正気に戻った観客が一斉に沸いた。
今度こそ俺は控え室へと戻っていった。

控え室に戻ると、ロッカーに置いてあった携帯に6通のメールが届いていた。

順番に見ていく。

ライラ

一回戦突破おめでとう！！
その調子なら大丈夫だな！！
こっちは波風が一回戦突破したぞ！！
俺もがんばるねーとな。

紅葉

初勝利おめでとう。
倒れちゃうんじゃないかって心配してたんだからね？
こっちも一回戦勝ちました。
お互い頑張ろう！！

桜

お兄ちゃんおめでとー！！
さすがお兄ちゃんだね！！
でも、あんなにきつそうにしたので心配です……。
無理しないでね？

綾芽

悠希さん初勝利おめでとーございます！！
私は悠希さんが勝つて信じてましたよ！！
お体は大丈夫ですか？
限界を感じる前に棄権してくださいね？

一葉

まずは初勝利おめでとー。
でもどうかしたの？
らしくなかったわよ？

大会運営

一回戦突破おめでとーございます。
対戦相手が決まりましたら再びメールさせて頂きます。

(ニコルからは無し、か。というか情報回るの早いな)

返信を打つ体力も無く、そのまま携帯を閉じた。

控え室を出ると、そこには先程ここに案内してもらった遙、里香、セシルの三人がそれぞれの顔に興奮を隠せないような表情を浮かべて立っていた。

「す、すごいです！！学年23位を瞬殺なんて！！」

真っ先に詰め寄ってきたのは遙だ。

若干気圧されていると、里香とセシルまでも寄ってきた。

「ゆっきーすごいですう。あれって身体強化あ？全く見えなかったよお」

「あ、あんな短時間の模擬戦見たことないでございますっ！！」

のほほんとした里香がそういうと、妙な尊敬語を使ってくるセシルが目を爛々と輝かせた。

「そ、そんなことないから、ね？」

ここで意識を手放すまいと必死に三人を宥める。
朦朧とする意識の中で俺たちはゲートまで移動した。

「あ、私たちは第9高校ですので」
「じゃあねえゆっきー」

「失礼いたしますっ!!」

ゲートまで到着すると、三人が先に転移する。

そこでようやく安堵の溜め息を吐くと、手放すまいと気を張っていた意識の糸がプツンという音をたてて切れてしまった。
突如視界が霞だす。

「くそっ……!」

俺はそこで意識を手放した。

まどろみの中でわずかに写る視界には、無表情な女生徒が立っていた。

「ゆっ!!」

誰かが俺を呼んだ。

重たい瞼をゆっくりと持ち上げると、そこには紅葉、ライラ、桜の顔があった。どうやら気を失っていたらしい。どこかの高校の保健室のようで、消毒液の匂いが充満していた。

「……どれくらい気を失ってた？」

「ここに運び込まれて二時間ぐらい……だと思っよ？」

安堵の表情を浮かべる桜。見回すと他のみんなも同じような顔をしていた。

「早川さんもさっきまでいたんだけどな。次が初戦だから行かせた」と補足するライラ。

彼の言うとおり確かに綾芽さんの姿が無い。

「……俺の次の試合は？」

「まさかまだ出るつもり！？無茶よっ！！」

ということはまだ棄権にはなっていないらしい。

俺はポケットに突っ込んだケータイを開き、大会運営からのメールを確認する。

「あと30分後か」

ベッドから起き上がり立ち上がろうとすると、再び激しい目眩に襲われてふらつきかけたが、すかさずライラが支えてくれたお陰で、もう一回倒れずに済んだ。

「こんな状態でもまだ単位が欲しいのかよっ！！！！」

ライラの怒声が耳元に響く。
いきなりのもので驚いてライラの顔を見上げると、少し褐色の顔を憤怒に歪めさせていた。

「そんなものために、これ以上ダチを放っておけるかよっ！！！」

“ダチ”。

その言葉が心に突き刺さる。

今までそんなことを言ってくれる友人なんて紅葉たちやレア持ちの一部ぐらいしかいなかった。

ただ自分の憂さ晴らしの為に力を使い回す俺を、殆どのやつは怖がるか、憐れんでいたんだと思う。

そんな俺を認めてくれたライラ。そんな彼の優しさに甘えそうになる。

「……悪いライラ。今はもう単位のことなんてどうでもいいんだよ」

だが、これだけは譲れない。

「じゃあ——！！」

「俺はあいつの影に怯えたくない。弱いあの頃のままで居たくない。これは俺の意地だ。例えお前らでも邪魔はさせねー」

例え唯一無二の友を失おうとも、もうあの頃の無力な自分に戻りたくない。

守れたかもしれない誰かを守れないなんて絶対に嫌だ。

ここにいる紅葉以外は意味わからない発言だっただろう。だが、俺の本気に気圧されたのか、次の言葉を言い返せないライラたち。そんな彼に背を向け、ふらつく足取りで出口に向かう。

「……………すまん」

最後にそう吐き捨てるように呟き、逃げるように次の会場へと向かった。

episode 17 二回戦 - 痛み -

第21高校、第一アリーナ。

大勢の歓声に包まれながら、俺はそのど真ん中に立っていた。

こんな中でも先程のライラとの会話が頭に流れ続けていた。

ライラは俺が今限界なんて言っていたが、こんな体調での学校の模擬戦なんて、何度となく赴いた戦地での命がけの戦いに比べたら全然マシだ。

だが、そう思う反面疑問に思うこともある。

この脳が破裂しそうな頭痛はなんだ？

これが血管の痛みだったらわかる。何度となく経験した“あれ”だ。

でもこれはなんだ？

再びの疑問に頭は答えを出してくれない。

これも頭痛のせいかな？

いや、普通の状態でも答えはでないだろう。

頭に張り付く問いを無視することに決め、俺は正面を見据える。

目の前では次の対戦相手の男子生徒が屈伸をしていた。

「僕は新原和彦にいほらかずひこ！今日はよろしくねっ！」

顔を上げ、人懐っこそうな童顔なこの少年、新原和彦が大きな声でそう言う。それが耳に入れた。少し寝たお陰か、さっきよりは大分マシになったみたいだ。

「ああ、俺は華瀬悠希だ。よろしく」

そんな彼にこちらからも名乗ると、それっきり会話も途切れ、周りの騒音とは逆に俺たちは静かに開始の合図を待った。

「これより二回戦の新原和彦vs華瀬悠希の試合を開始します」

女性教員のその宣言がアリーナ全体に響いた。それと同時にざわつきも収まる。

一試合目が嘘のように、まだ痛む頭でそんなことを確認することができた。

そんな中で和彦の呟き声が耳に入る。

「ジェネレート」

そう言い放つと同時に彼の右手に光が集まり弾ける。現れたのは杖だった。

「特化型？」

「そうだよ」

俺の疑問に肯定の返事で答える和彦。

それは綾芽さんと同じ特化型の補助武装だった。

「君は？」

まじまじと見てみると、和彦が首を傾げながら尋ねてきた。その後の言葉が省略されていたが武器をどうするのか、というものだろう。

少々迷ったが、今は少しでも魔力の消費を抑えたかったので首を横に振る。

渋い顔をされると思ったが、彼は別段気にした様子も無くただ「そう」とだけ応えて武器を構える。恐らく俺の第一試合の映像でも見たのだろう。この会場はカメラがいくつも設置されていて、校内ページでどの試合も見られるらしいからな。

「では始めてください」

そんな感慨に浸っているといきなり開始の合図を告げられ。一瞬反応が遅れた俺は嫌な気配を感じて真横に飛ぶ。すると俺のいた場所に突如火柱が上がった。

あれ？デジャブ？

前にも同じようなことが合ったような気がして首を傾げる。そんな間にも和彦は術式を展開させ、次々と様々な魔法を放ってくる。俺はそれをかわし、徐々に距離詰めていく。

残り三メートルを切った頃、俺はある異変に気が付いた。

（なんでさっきから同じような攻撃してんだ？）

和彦の放つ魔法は、全て遠距離系の単発攻撃。属性付きではあるが、当たらないのだから次の手を打ってもいいはずだ。

手札を変える暇がない？いや、でも何か隠して――。

思考に脳を傾けながらも、徐々に接近する。あと二メートル。

「——ッ!!」

二メートルを切った辺りから変化に気がついた。

和彦が笑ったのだ。

攻撃が止まる。

刹那の勘を頼りに後ろに飛ぶ。だが、

「もう遅いよ」

和彦が一瞬早く術式を発動させた。俺から半径五メートルの土が、紙を捲るように俺へと迫る。

【土属性魔法：土塊流丸】

上下左右逃げ場のない地面が押し寄せてくる。この魔法は対象がある程度近くにいないと発動ができない。さらに、魔力消費の激しい高等魔法だ。

これが決まれば勝ちが決まったような物だろう。本人もそう思っているに違いない。

まあ相手が俺で残念だったな。これなら外から中が見えない。

「トレース」

マジック・トレース
瞬間展開を使って、一瞬で刀形態の武器型補助武装を呼び出し、魔力を込め一閃。

【無属性魔法：風切】

無属性魔法とは、その名の通り属性の無い魔法の総称だ。魔力の塊を打ち出すと解釈してもあまりかわらないだろう。

魔力が斬線にしたがって飛んでいく。そして土の壁にぶつかつた瞬間、土の壁が真っ二つに切れた。切り開かれた土の壁を悠然と通り抜け、辺りを見回す。

こちらをみる視線の多くはそんな俺の態度、そして手に持つ刀に疑問や驚愕しているものが大半を占めている。その中でも和彦が一番呆然としているだろう。決まったと思つた魔法があっさり切られ、本人は飄々とでてきたのだから当然だ。

そんな彼の心情を察し、素直な感想をもらす。

「よくやるぜ。ずっとあの魔法と他の魔法の術式を並立展開させてたのか。どうりで低レベルな魔法しか打ってこないはずだ」

術式の並立展開、それは複数の術式を同時に展開させることを指す。恐らく三年でも極わずかな人しか使えない技法を彼は不完全とはいえやってのけたのだ。

前にこの学校のレベルが低いなんて思ってたが訂正しなければならぬ、などと思いつつ、和彦との距離を一瞬で詰め、いっせいのときのように刀を突きつけ、ニコリと微笑む。

「……降参します」

両手を上げる彼のその宣言で、この日の俺の試合は全て終わってしまった。

和彦との試合を終えて、俺はすぐに寮へ戻った。

模擬戦中は忘れられていた頭痛などが再び襲ってきたからだ。寮に戻る途中も何度か意識が飛びそうになったが、なんとか到着できた。

着替えるのも億劫でそのままベッドに倒れ込む。

だが、確認しなければならなかったため、ポケットに入れたケータイを取り出した。

大会ホームページに接続し、試合状況を確認する。

（紅葉、ライラ、綾芽さんも全勝。ニコルは……）

彼女の名前を探す。

（……………こっちも勝ち進んでるな）

ニコラ・ベールの名前を見つけ、内心で安堵すると共に当然か、とも思った。このままいけば明日の最後には俺と当たるのか。

案外早めにやりあえそうだと思いながら、激しい眠気に身を任せ、泥のような眠りについた。

episode 18 三回戦・召還術師・（前書き）

すみません

新原雅人↓新原和彦に変更します（汗）

本当にすみません……

兄さんは優しくった。

弱きを助け、悪を裁く。俺にとってのヒーロー。

兄さんは強かった。

戦場では敵味方が恐れる程の鬼神の如き力があつた。

でもやっぱり優しくった。

殺されかけている仲間がいたら自分の危険を省みず突っ込んでいった。

そんな兄さんを尊敬していたし、憧れていた。

でもあいつがやってきた。

俺のせいで兄さんがあいつに殺された。

今の世界を変えられるだけの人材を俺ごときの存在のせいで殺させてしまった。

俺は自分とあの銀髪の男を決して許さない。

絶対に俺はあいつを殺す。

それ以外に兄さんと世界への償いが思い浮かばない。

けど俺は弱い。

あの男を思い出しただけで恐怖や怒りに自我を失ってしまう。

兄さん、俺は兄さんみたいにはなれないよ。

「——ッ!——!」

焼かれるような頭痛で俺は目を覚ました。

痛い。

頭を抱えうずくまるが、この痛みは消えそうにはない。

しばらくそうして、体が痛み慣れるのを待ち、時間を確認する。

今は朝8時44分。

2日目以降は自分の試合にだけ行けばいいのだが、あと約一時間後には俺の試合が始まる。

そんな丁度いいタイミングで頭痛で起きる。

こんな偶然ってあるのか？

もしかして身体が戦いを求めている？

頭をよぎる憶測を無視して身体を起こし、昨日着たままだった制服すら着替えず、覚束ない足取りで俺は次寮を出た。

「やあ」

寮を出ると、突然声をかけられた。振り向くと、声の主は人懐っこそうな笑みを浮かべている。

「……新原君、だっけ？」

大変失礼なことだが、彼の名前が一瞬浮かんでこなかった。俺の不自然な間に気が付いたのか、少し苦笑している。

「和彦でいいよ。昨日で試合終わったから君の試合を見に行こうと思ってね」

「俺も悠希でいい。それでわざわざ待ってたのか？」

彼がここにいるということはそういうことだろう。和彦のような術師をうちの学校では聞いたことがない。だが、俺の予想と反して彼は首を振った。

「それもあるけど、聞きたいことがあってね」
「なんだ？」

首を傾げる。

すると彼は笑みを消し、真剣な顔で尋ねてきた。

「……体調は大丈夫？」
「——ッ——！」

まったく予想していなかった。バレたのか？たかが生徒に一体なぜ？驚愕していいると、和彦が再び言葉を続けた。

「僕の家は代々医師の家系なんだ。筋肉の使い方わかる、悠希は筋肉じゃなくて魔力で身体を動かしてるよね」

そんなことまでバレてたのか。

俺は今も身体のを全てを魔力で動かしている。もしこれを止めようものなら立ってられないだろう。

だが、そんなことで俺の体調がわかるやつが居るとは思わなかった。

「だから今日は僕が悠希をサポートしようと思ってね。本当なら止めさせたいところだけど、できない理由があるんでしょ？」

「それは……」

話せない。話すのであれば全てを明かさなくてはならない。思案顔になった俺を見て、和彦が再び首を振った。

「別に聞こうなんて思っていないよ。ただ、悠希のケアや、倒れたときに早めに処置できたほうがいいと思って。よければ僕を使って欲しい」

どう言うつもりなのだろう。昨日知り合っただけの俺にこんなに親切にしてくれるなんて。

思わず彼の目を覗き込む。少なくとも邪心は無さそうだ。

「……すまない。じゃあ宜しく頼む」

「任せて！」

笑顔で頷く和彦。彼の厚意に甘えることにして、俺たち二人は次の試合に向かった。

第3高校、第2アリーナ。

俺たちはその控え室に居た。和彦の真意は未だにわからないが、悪い奴ではなさそうなので別段気にする必要も無いだろう。

「じゃあ行ってくる」

「うん、がんばってね」

ベンチに腰掛けている彼にそう声をかけ、場内へ歩いていった。

フィールドは相変わらずの熱気に包まれている。俺が入った瞬間に歓声が沸いた。やはり第一試合や第二試合よりも数が多い。

上に進めば進む程負ける人も出てくるため、観客がその都度増えるのは納得できる。だが、それにしてもこれは多すぎる。

大方、一回戦で補助武装無しで瞬殺、さらには学年10位の和彦（これはさっき聞いたことだが）に勝ったとあって俺の注目度も鰻登りに急上昇中なんだろうなあ。単に手加減してる余裕が無いだけなのだが。

げんなりしながら中央に移動する。対戦相手はもう来ているようだ。

「よ、よろしくお願いしますっ！！」

「あ、ああ。よろしく」

いきなり対戦相手の女子生徒に話しかけられてびっくりしたが、相手も緊張しているようで、こちらおどかさよりは自分の緊張を解すためと言った方がいいのかもしれない。

「これより、三回戦、華瀬悠希^{たかみや すず}vs高宮鈴の試合を開始します」

開始前のサイレンが鳴る。

「ジェネレートっ！！」

そんな中、一際大きな声で目の前の女の子が言い放った。彼女の左手には和彦や綾芽さんと同じ杖。

昨日と同じ嫌な予感しかせず、とりあえず俺も武器を呼び出すことにした。

「ジェネレート」

両手に光が集まり弾ける。二丁拳銃の武器型補助武装だ。

俺が具現化させると、やはりと言うつかお約束と言うつか、周りからざわめきが起こった。

やっぱり目立つよな、などと呑気に思いながら開始の合図を待った。

「では始めっ！！」

「オープンっ！！」

開始が告げられた瞬間、彼女が真っ先に口を開いた。これはまずい。

彼女の周りに5つの魔法陣が浮かび上がり、その中から五体の何かが現れた。

二体はでかい蜂のような生物。他三体は白銀の狼。

「召還術師か……」

五体同時に多重召還できるのだからそこそこの召還術師なのだろう。でかい蜂はランクEの『ポイズンキラー』、狼はランクDの『アイスウルフ』。

魔獣にはランクという物がある。上から準にSS、S、A、B、C、D、E、Fまであり、強さや危険度によって格付けされている。ちなみに魔獣指定区域も危険度から同様にSS〜Dランクまで枠組みされる。

まあランクEとDならば妥当な所だろう。

迫り来る魔獣たちから避け、雅人の時と同じように俺は徐々に近づいていく。

魔獣たちはそれをさせまいと俺に食らいつこうとしてくる。だが、俺は引き金に手をかけた。

「大人しくしてろ」

【雷属性添加：銃：纏・封縛】

雷属性の魔法を纏わせた弾丸を五発撃ち出す。轟く銃声の中で銃弾が五体の魔獣に触れると、突然魔獣たちが痙攣しだした。

“封縛”は体に電気を流して動きを封じる魔法。泣き出すことも適わず、五体の魔獣は地面に平伏した。

「どうする？」

銃口を術者に向け、問う。彼女は迷うことなく手を上げて降参してくれた。

「勝者！！華瀬悠希！！」

その瞬間歓声という名の銃弾が飛び交い、俺の頭を揺さぶる。いや、もとからあった痛みが集中が切れたせいで戻ってきたのだ。

再び足元が覚束なくなる。悲鳴を上げる身体に鞭打って控え室に戻る。

っ
て
い
っ
た。

「悠希っ！」

控え室に戻ってくると、和彦がすぐさま駆け寄ってきて、よろける俺の身体を支えてくれた。

「お前、将来いい嫁さんになるよ」

「ぼ、僕は男だよっ！！」

中学生に間違えられそうな童顔を真っ赤に染め、頬を膨らませて抗議してくる和彦。それを無視してケータイを取り出す。

「次はいつ？」

すると、先程の抗議を止め、和彦もケータイを覗き込んできた。いつ、とは次の試合の時間だろう。

「二時間後、みたいだな」

まだ俺の対戦相手の試合は行われていないらしい。そのどちらかが勝てば俺と当たるようだ。

「どうする？見に行く？」

尋ねる和彦に、しかし俺は首を横に振った。

「いや、見ても仕方ないだろ。どっかで休む」

「大した自信だね。次は多分学年5位だよ？」

……………5位？

「それって学年6位の波風紅葉より強いのか？」

「彼女を知っているのかい？あー、そう言えば彼女と模擬戦をして勝ったという噂があったね。うーん……………」

首を傾げて考えているのだろう。やがて顔を上げ口を開いた。

「どうかな。リオ……………あ、学年5位のエリオ・コンティのことなんだけど、彼はパワータイプだからね。技術では波風さんの方が上だと思う」

「じゃあなんで紅葉が6位でそのエリオってのが5位なんだ？」

俺の問いに「知らないの？」と、逆に首を傾げる和彦。

「トーナメントの決勝戦が終わったら上位20人でバトルロイヤル形式で3日間サバイバルが行われるんだよ。それで先に負けていった人たちの順位が決まるってこと」

「つまり紅葉が先に誰かに負けたってことか」

「そういうこと」

なるほど、だからトーナメント期間がこんなにも長いのか。俺が一人で納得していると、補足とばかりに和彦は続けた。

「去年は学年1位の人が片っ端から片付けていって1日かからずに終わったんだよね。そのお陰で僕が10位に入れたんだけど……………」

そんなやんちゃな奴なのか。学年1位って。

苦笑いしながら言う和彦の頭にぽんと手を置き、俺は首を振った。

「いんや、お前の腕はなかなかのもんだったぞ。本当ならもう少し上の順位だったはずだ」

俺がそういうと、彼は照れたように頬を染め出した。そんなやりとりをしながら俺たちは控え室を後にした。

「和彦ー、水くれー」

「はいはい」

結局保健室のベッドで休むことに決め、甲斐甲斐しく世話をしてくれる和彦を眺めていた。

「お前、本当に男辞めて女になった方がいいと思う。世界の為に」
「そんなことないよっ!!」

俺の弄りにも一々反応してくれたり、色々大変だなこいつも。自分がしていることを棚に上げてそんな感慨に浸っていると、和彦が水を持ってきてくれた。

「はい。タオルもそろそろ取り替えた方がいいね」

俺の額に置かれたタオルを取り、ひんやり濡れた別のタオルに変えてくれた。

本当になんでこいつが男なのだろう。まるで母親のようだ。

「お母さーん、アイス食べたーい」

「お腹こわ……お母さんじゃないよっ！！男だよっ！！」

しまった、つい言葉に出てしまった。

プリプリ怒りながらも働き回る和彦から目を離し、ケータイを開いて対戦相手の試合を見ようと思ったが、手で制された。

「どうせ見るならあのテレビで見ようよ」

和彦が指差したのは、保健室の壁に埋め込まれている大画面テレビだった。

「見れんの？」

「校内放送で今あつてる試合なら全部見られるよ」

ほう、それは凄い。

素直に感心していると、和彦が置かれていたリモコンのボタンを手早く押す。電源を入れチャンネルをいじりだすと、お目当ての試合が映った。どうやらこれから始まるらしい。

「あのハルバート使いがそうか？」

「うん」

頷き肯定。画面の中ではハルバートの武器型の補助武装を持った長身の男と、杖状の特化型を携えた気弱そうな女の子が対峙していた。

なんだか――。

「温厚そうな奴だな」

「ははは、実際リオは優しいからね」

もつとこう、ゴツいのを想像していた俺は決して悪くは無いと思う。
パワー型って言うてたし。

俺の言葉に苦笑しながら和彦は画面を見つめていた。

――始まる。

それから俺たちは無言で試合の行く末を見守った。

「ふーん、土属性主体のゴリ押し、か」

試合が終わり、俺はそんな感想をつぶやいた。結果は圧勝、もちろん学年5位の。

「あの女の子もまあまあ強かったけど、相手が悪かったね。ご愁傷様」

おい和彦、テレビの向こうに向かって「ご愁傷様」なんて止めなさ

い。かわいそうだろう。

合掌までしてそんなことを言い出す彼に心の中でツツコンで、先程の試合を思い返していた。

試合は終始女の子が魔法を撃つ、5位が弾くまたは土属性の魔法で相殺、距離を詰めて攻撃、女の子が避ける、の繰り返しだった。特化型の弱点である近接戦に持ち込む確実な戦法だ。なのだが、

「……えげつねー」

それが素直な感想だった。なすすべなく倒されていく女の子の姿があまりにも可哀想に見える程に。俺の呟きに苦笑いする和彦も同意見なのだろう。

「まあ、確實って言えば確実なんだけどな。あれは事前に相手のことを調べてキチンと対策練った戦い方だったし」

「誰だって相手を調べたりするよ。悠希みたいなのが少数派だけ」

あれ？そうなの？

首を傾げる俺に、呆れたような視線を投げかけてくる。

和彦は最後にはあく、長いため息について俺に向き直った。

「で、今回は相手の情報を手に入れたよ。どんな戦い方にするの？」

「どんなって言われてもな……」

相手も俺のことは調べてるだろうしなあ。今まで使った武器は銃と刀。手持ちはまだまだあるとはいえ、あまり手の内を見せたくはない。

それに伝説武器は論外。国家機密で情報漏洩されていないのがあるとはいえ、そんなものが普通の学生相手に使えるわけもない。

「もういつそ両方使うか」

「？何が？」

だんだん考えるのが面倒になってきた俺は投げやりに結論を出したのだが、つい声に出してしまっていたらしい。首を傾げる和彦に「気にすんな」と言っただけでベッドから降りる。まだふらつくが寝ていたお陰か、和彦の介護のお陰かだいぶマシになっていた。そんな彼にふと振り向いて笑顔を向ける。

「将来はナースになれるぜ」

「男だよっ！！」

親指を立てて最高にいい顔をしている俺に顔を真っ赤に染める和彦。そんな俺たちは次の試合へと向かった。

e p i s o d e 19 作戦会……議？（後書き）

感想お待ちします！！

「体調は？」

心配気に見つめてくる和彦に「問題ない」とだけ答えておく。

第18高校、第2アリーナ控え室。

そこで俺たちは次の試合を待っていた。あと10分後にはここで俺は学年5位のエリオ・コンティと戦うことになる。戦うと言ってもたかが学校の模擬戦なのだが。

和彦の最後の体調チェックを受け、軽く伸びをする。

まだ体調は悪い、それも最悪だ。だが魔力で身体全てを動かせば問題ない。普段より魔法には制限がかかるが、どでかいの一発撃ってアリーナを吹っ飛ばすわけでも無いのでこちらも問題ないはずだ。

「じゃあ行ってくる」

そう一声掛けて、競技場に向かっていった。

場内では既に対戦相手が待っていた。テレビで見た以上に優しそうな顔をしている。

「君が華瀬君だね。今日はよろしく」

突然話しかけられたらことに多少びっくりしたが、差し出された手にいつまでも反応しないわけにもいかず、手を伸ばして俺たちは互いに握手を交わした。

「ところで、和彦に勝ったんだって？じゃああの噂は本当だったんだね」

手を離すと、いきなりそんなことを言ってきた。こんなやつにまで広まってるのかよ、などと自分でやったことを棚に上げてげんりする俺。

そういえば、

「和彦とは知り合いなのか？妙に仲良さそうだけど」

なんか和彦も“リオ”って呼んでた気がするし。
俺の疑問を肯定するようにエリオは頷いた。

「同じ第3高校のクラスメートだよ。中学の頃何度かトーナメントで一緒になったからね」

なるほど、クラスメートなわけか。どうりで。
一人で勝手に納得していると、試合開始前のサイレンが鳴った。

「これより四回戦、華瀬悠希vsエリオ・コンティの試合を開始します」

その宣言で俺の五感が徐々に冴えていく。それと同時に身体の痛みも引いていくようだ。

「「ジエネレート」」

俺とエリオは同時に呟く。光が集まり、俺の両手には二丁の銃が、エリオの手にはハルバートが現れた。

「あ、そうだ」

言い忘れていたことがあった。

「どうかした？」

首を傾げるエリオ。試合前に呑気にこんな反応が出来るのは、彼の自分が負けるわけが無いという自信のためだろう。そんな彼に一つ言っておかなくてはならないことがあったんだった。

「負けても恨みつこ無しな」

「ははは、お互いね」

笑い合う俺たち。きっと周りから見るとアホにしか見えなんだろうなあ。

「始めてください」

バカなことをやっている、開始の合図がアリーナに響いた。俺たちは同時に駆ける。

そういえば入学試験のときにもハルバート使いのヘイル先生とやりあったな、などと思いながら銃口を向け、両手の引き金を引いた。

二回の銃声。

牽制目的で放った銃弾は狙い通り、エリオの脚を一瞬止めた。

それで充分。

「トレース」

マシククトレース

瞬間展開。一瞬で武器を呼び出す俺だけの技能。他の人間には何も無い空間に突然現れたように見えるその技を使って呼び出したのは日本のスぺアマガジン。

素早くリロードを行い、そして再び引き金を引いた。

飛び出す銃弾。さっきと同じようパターンだ。だが、

「術式展開」

俺が呟くのと変化が起きるのはほぼ同時だった。

銃弾がはじけたのだ。

突如エリオの周りに冷気が漂い始める。変化を感じ取ったエリオは、さすがの反応速度で後退しようとする。だが、

「発動」

再び呟く。

エリオの周りの水分が凝結。瞬く間に巨大な鳥籠ができあがった。

「な、なんだよ、これ……」

呆然と立ち竦んで消え入りそうな声でそんなことを呟く。まあ驚くわな。

これは俺が適当に考えて作ってみた簡易魔法術式具“術式弾”だ。銃弾一発に術式一つ分を詰め込み、魔力を込めて打ち出すと発動できる優れもの。

元々は「一発一発違う魔法使えたら面白いなあ」などという子供心から作り出した物だが、なんとまあ何だかんだで出来ちゃったのだ。特許取ったら儲かりそうだが、生憎そっちには全く興味無いので今のところ広めるつもりはない。

そんな隠し玉ならぬ隠し弾を持っていたことなんて知るはずないエリオは、もう脱出しようともせずポカンとしている。

「おーい」

手を振っても反応が無い。これって俺の勝ちでいいの？

審判に尋ねようにもその審判さえもポカンとしているのでどうしようもない。

……………イラッ

だんだんイライラしてきた俺は、通常弾に入れ替えて球切れおこすまでガンガン撃ちまくった。もちろん魔力コーティングして威力を落としている。

「いたたたたっ！！！」

今やパチンコ玉並みの威力に変わった銃弾がエリオの身体のうちこちに当たり、彼は涙目でうずくまりだした。

「目え覚めたか？」

「……痛い」

こいつは意外と泣き虫なのだろうか？涙目で訴えてくる姿が妙に様になっている。なんだか自分が弱いもの虐めしている気分になってきた。

「やらないなら降参してくんない？なんか俺が惨めになってくる」

「え？あ、ああ、すまない」

再びエリオがハルバートを構え、氷でできた鳥籠の檻に一振り――。

ガキーン。

金属同士が衝突したときのような甲高い音を上げたと同時にエリオは数歩後ろによろけた。

「か、かったいなー……」

「そう作ったからな。もう終わらせるぞ？」

問いではなく確定として呟き再び術式弾のマガジンと交換し、エリオに向けて引き金を引く。

「発動」

銃弾がはじけ、術式が発動。

【雷属性魔法：蛇竜】

名前の通り雷でできた蛇竜が現れ、標的に向かって這うように進む。そして鳥籠の中に入った瞬間、獲物に飛びかかる。

さすがにまだ動けないなんてことはないエリオだったが、必死にかわそうとするも、完全に避けきることはできず尾に触れた。

「がつ！？！？」

その瞬間、流れ込んできた電流に短い呻き声のようなものをあげてついに倒れ込んだ。

「勝者、華瀬悠希」

勝敗が決した。これで次はニコルとだな。

ピクピク、と痙攣しているエリオを尻目に俺はその場を後にしたのだった。

episode 20 四回戦 - 術式弾 - (後書き)

すみません。

明日から更新に少し日を空けるかもしれません……。

「和彦、次の試合は？」

場所は保健室。

すっかりお世話になってしまっているベッドに横になりながら次の試合の時間を聞いているところだ。

「ちよつと待ってて」と、ケータイを取り出してトーナメントのホームページにアクセスした和彦。やがて、終わったのか顔を上げて口を開いた。

「次は三時間後みたいだね。対戦相手はニコラ・ベーレさん。今までの試合を見るかい？」

尋ねてくる和彦、しかし俺は首を横に振った。

「いや、あいつが記録に残るような模擬戦で手の内明かすような真似するはずない」

それに本気でやるはずもない。そんなことしたら結界の中だろうと対戦相手の首が飛んでる。

言い切る俺に、和彦は多少目を見開いて驚きを表した。

「へえ、よくそんなことわかるね。知り合いなのかい？」

「ああ」

一言だけ肯定で返すが、和彦もそれ以上のことは何も聞かずについて

くれた。こういう相手への心配りができるやつってすげーな。尊敬できる。

そんな感慨に浸っていると、コンコンとノックの音が部屋に響いた。

「どつ——」

——ぞ、と続ける前にガラガラと、扉が開かれる。前にも言った気がするが、こんな失礼な入室の仕方をするやつを俺は一人しか知らない。

「悠希っつ！」

「帰れ一葉」

いきなり飛びついてきた一葉をベッドから飛び降りてかわし、威嚇しながら睨みつける。傍から見たらさぞかし奇妙な光景だろう。

「り、理事長!？」

すっかり忘れていた和彦が素っ頓狂な声をあげた。何がどういふことなのかわからないと言った感じで、目を白黒させている。

「あ、新原君だっけ？悠希がお世話になってます」

「あ、え？は、はい、こちらこそ……」

いきなり一葉の矛先が自分に向けられて気が動転しているにも関わらず、彼女のお辞儀を反射的に返してしまうのは、彼の育ちの良さの現れだろう。確か医者の家系とか言ってたからな。

思わぬ発見をした俺だったが、さすがにこのままだと和彦が気を失いそうな程混乱しているので、いい加減説明してやることにした。

「和彦、少し落ち着け。こいつはただの知り合いだ。空気と思っ
ればいい」

「あー、それひどーい」

いきなり一葉が拗ねだしたが取りあえず無視。

和彦はというと、苦笑いしながらもどうにかいつも通りの俺の態度
に落ち着いてくれたみたいだ。

それを待って、俺は一葉へと向き直った。

「で、何の用だ？」

「あ、そーだった」

わざとらしく手を叩いて、そんなことをほざきやがった。呆れてた
め息を吐く俺の心情などつゆ知らず、くるりと回って和彦のほうに
向いて、申し訳なさそうに手を合わせて言った。

「悪いんだけど、悠希と話があるからちょっと席を外してくれない
かしら？」

なんだがすごく嫌な予感がするんだが気のせいだろうか？気のせ
いであって欲しい。

そう言われた和彦は一瞬どうしようか、と俺に目で聞いてきたが、
とりあえず俺が頷くと素直に席を外してくれた。

ピシャリとドアが閉まったことを確認した一葉は、再び俺に向き直
った。

「さて、聞かせて貰いましょうか。なんで術式弾まで使ったの？」

そのことか。

「別に。“トライデント”と“ジャッジメント”は使えないんだ。なら手持ちで使えるのを増やしたほうがいいってだけ。術式弾は公にしてないどころか、知ってるのはお前らと一部のレア持ちだけだし、正体がバレることもないからな」

実際そういう目的があって使ったわけだし、嘘はついてないよな？ 自問自答を繰り返している俺を見て、「そう」とだけ答える一葉。なんか今日はやけに聞き分けがいいな。訝しく思っていると、次の言葉を投げかけられた。それは奇しくも今朝の和彦と同じ問いで。

「で、体調は大丈夫なの？」

……………。

「……いつ気付いた？」

「二回戦のとき。いつもより脚裁きが固かったしね」

「良くわかるな。画面越しなのに」

俺の素直な賞賛に、えへんと豊満な胸を突き出して威張る一葉。褒めるすぐこれだ。

「風邪？ 魔力を循環させて回復力上げてる？」

「ああ。けど、どうにも効き目が無いらしい」

だが、俺のその言葉の次の瞬間には真剣な面もちで恐る恐る聞いてきた。

「……もしかして“転生継承の儀式”？ これ以上はさすがに悠希で

も……」

「いや、違うと思う。第一“痛覚系”ならまだしも俺は“血液系”だ。もしそうなら頭痛じゃなくて血管にダメージがくるはずだ」

他の人間が聞いても全くわからないだろう単語の嵐。

その言葉で安心したのか、一葉は表情を緩めて安堵のため息を吐いた。

その話はこれまでということ、話題は俺の次の試合のことになった。

「次は“トート”が相手なんですよ？ そんなんで大丈夫なの？」

「……ほんと良く知ってんな、お前。探偵にでもなってるよ」

こいつにニコルの話をした覚えは無いのだが……。

もう諦めた。はなからこいつに探り合いで勝てるはずがないんだ。今までの俺の人生がそう物語っている。

最後に一回盛大にため息を吐いて、言葉を紡ぎ出す。

「ああ、術式弾が使えるメリットがあるつつつても向こうはレア持ちだ。俺みたいにリロードせずにすぐ撃てる。下手すりゃ“ファラックス”使っ羽目になるかもな」

「あれって情報漏洩されてないんだっけ？ 国際バンクのデータにも載ってないの？」

一葉の問いに頷く。別に一葉には隠すようなこともない。

「あれもお前らと一部のレア持ち、それと日本の上層部しか知らないはずだ。そもそもあれはバレるような代物じゃない」

「あー、確かに」

一葉が想像したのか、少し苦笑を浮かべていた。

聞きたいことは全部聞いたのか、いきなり回れ右をして扉に向かいだした。だが、扉の前に立つとふと足を止めた。振り向かないまま口を開く。

「無茶はしないよね？」

「昔みたいな真似はしねーよ。だいたい学校のイベントで無茶なんてしないから心配すんな」

そう応えると、そのままドアを開けて出て行ってしまった。顔を向けていなかったなので表情まではわからなかったが、雰囲気は笑っていた気がする。

少し元気が出た俺は、やっぱり払いされた和彦を呼び戻すためにケータイのコールボタンを押した。

e p i s o d e 2 1 探偵のような理事長（後書き）

感想お待ちします!!

episode 22 決意、出陣

「で、なんで悠希なんかが理事長の知り合いなの？」

「それってちよつとひどくないか？」

保健室に帰ってきた和彦の一言はそれだった。ちよつとムツときたが、まあ当然の疑問だろうと無理矢理納得することにする。

ただ、どう話せばいいか分からず、少しの間考え込んでしまった。

「えつとな——」

俺が口を開いた瞬間、幸か不幸か扉が勢いよく開かれた。

「ゆうー!!」

「はっ!?!紅葉!?!」

いきなり扉が開いたことに驚いてそつちを見ると、いきなり紅葉が息を切らしながら走ってきた。そのあとからも桜、ライラ、綾芽さん、紅葉もあわせて4人が駆け込んでくる。

突然のことでニコルが居ないことなど気にかけることもできず、訳が分からなくなっていた俺に突如涙目の桜が抱きついてきた。

「一葉お姉ちゃんからお兄ちゃんが保健室にいるって聞いて……心配したよう……」

掠れ声をあげながら顔を俺に埋める桜。周りを見ても心底心配した、といった面持ちの三人と、俺と同じく気が動転している和彦がいるだけだった。

まあ、一葉が教えるだろうことは何となく予想できていたことだが、余りにも早すぎるだろ。

一番考えられるのは誰かが試合中で、それが終わって来たところなんだろう。

そんな憶測が脳内で飛び交っていると、黙っていたライラが口を開いた。

「ったく、とうとう倒れたのかって三人とも心配してたんだぞ。もつとすまなさそうな顔しろ、バカヤロウ」

「ライラさんもここに来るまでハラハラしてたくせに」

「なっ、何言つてんだよ綾芽ちゃん！！別にそんなんじゃない」

「別にライラさんだけじゃないんですから気にしないでいいのに」
「なっ——！！」

真っ赤になりながら抗議するライラにも動じずニコニコ微笑む綾芽さん。

そんな彼女を見て俺は――。

「すまん」

桜を離し、深々と頭を下げる。威勢を張った割に試合が終わるたびに保健室で和彦に介護されるこの始末。目も当てられない。

ゴスッ

「いつてッ！！！」

そんなときにいきなり頭上から鉄拳が降ってきた。ズキズキ痛む頭を抑えながら顔を上げる。そこには拳を握り締めながら怒りの表情

をした紅葉の顔があった。

「謝るなら最初から心配かけないでよッ！私たちの気も知らないで！！」

叫ぶ紅葉。

返す言葉も見つからない。自分の意地の為だけにこんなにも心配してくれる友人たちが嬉しくもあり、同時に本当に申し訳ない。

「……すまん」

「……バカ」

再び頭を下げる俺をポカポカ殴る紅葉。

しばらくそうしていると、やけに言いにくそうな声が聞こえてきた。

「あのお……僕出てようか？」

居場所の無い和彦の情けない一言。だが、周りの反応は呆れなどではなかった。

「あれ？新原君？どうしてここにいるの？」

そんな彼が居たことに心底驚いたような表情をする紅葉。今まで気づいてなかったのか……。

半泣きの和彦を見て、なんだかすごくいたたまれない気分になってしまった。仕方ないので説明してあげよう。

「昨日の対戦で俺の体調に気付いたらしい。それで和彦の親が医者らしくて、面倒見てくれることになったんだよ。そうだよな？」
「うん、うん」

コクコクと何度も頷く和彦に苦笑していると意外や意外、ライラが和彦に向かい合った。

「確か学年10位の新原和彦くんだったか？こいつが迷惑かけたみたいで悪いな」

「お前は俺の保護者か！！」

なんだか先程の一葉のようにぺこりと頭を下げるライラと、同じく頭を下げる和彦に激しくツツコム俺。

そんなのお構いなしに世間話を始めた5人に、俺は苦笑しながらも混ざっていった。

第11高校、第2アリーナ。

何の因果か俺とニコルの決戦の場は俺らのホームグラウンドとなった。

その控え室。俺たち六人はそこで試合時間まで待つことになった。控え室には試合中継の大画面テレビが設置されており、ここで試合を見ることができる。何かあったときのために、と聞かない5人はここで応援してるとのことに決めたらしい。もう半ば諦めている俺は、集中するために昔ながらの黙想を始めていた。

「そついやお前知ってるか？」

そんなときに主語の無い問いをライラが投げかけてきた。思わず「何を？」と尋ね返し、目を開く。だが、答えたのは綾芽さんだった。

「ニコラさん、全試合その場から指すら動かさずに対戦相手を気絶させてるんです。上級生の間でもその話が持ちきりなんですよ」

「ふーん……」

あいつ意外と派手なことやってんだな。

考えられるのは幻覚系の魔法で攻撃を隠しているか、あるいは自分の居場所を錯覚させているか。まあなんにしても、

（レア使ってたか……）

ここで言うレアとは伝説武器の呼称のことだ。

武装展開時の光を感じていないということは最初っから展開してんだろうしな。それも隠蔽^{ハイド}かなんかの幻術で隠してるだろう。あんなの普通に持ち歩いてたら恐ろしすぎる。

そんなことを考えていると、開始10分前のアナウンスになった。背中に走る寒気を振り払うように俺は立ち上がる。

しかし、場内に入ろうとしたところで袖を掴まれた。振り向くと紅葉が俯きながら袖を握っている。

「……どうした？」

なるべく優しい声でそう囁きかけると、彼女はゆっくり口を開いた。

「無茶はしないでね？」

「はははっ、一葉にも同じこと言われた」

それはさっき一葉が保健室から出て行くときの去り際のセリフと同じものだった。微笑みながらそう告げると紅葉は顔を真っ赤にしなからブツブツ言い出した。

そんな彼女の頭にポンと手を乗せ、他の4人にも目を向けて優しく微笑んだ。

「安心しろ。別に死にやしないって」

そんなバカみたいな宣言に、全員「なんだそりゃ」と言った感じでそれぞれ笑みを浮かべた。

「じゃ、行ってくる」

「気をつけてよ」

「勝ってこいっ!!」

「がんばってね!」

「怪我しないでくださいね?」

「何かあってもすぐ駆けつけるよ」

俺がそう言つと紅葉、ライラ、桜、綾芽さん、和彦の順で応援?の言葉をかけてくれた。そんな彼らに背を向け、俺は場内に向かう。

だが、一つ嘘をついた。

本気でやりあったら死ぬ、ということだ。しかも俺の体調は最悪。さらにレアは使えない。悪条件に悪条件が積み重なり、俺はこの歩みが死へと繋がっているような気がして背筋を震えた。けどまあ、

「後戻りなんてできるわけないよな」

それに簡単になんて死んでやるもんか。
そう自分へ言い聞かせ、徐々に聞こえてくる歓声へと向かって足を
早めた。

歓声と言う名の騒音を浴びながら俺は対戦相手、ニコラ・ベールと向かい合っていた。なんと彼女は前の試合が終わってすぐに上がってきていたらしい。

多少罪悪感を感じはしたが、今更どうこうなることでもないし、向こうは何も感じはしないだろう。ていうか何考えてんのかわからんからそう思うしかない。

俺が来たとき少し顔を動かして以来微動だにしないニコルを見て、なんだか無性に帰りたくなった。

そんな俺の内心とは裏腹に観客の声援は時間が過ぎることに激しさを増す。恐らく謎の転校生二人の対決、みたいな感じで興味を持ってきた人がかなりいるだろう。東京ドーム並みの広さのアリーナの観客席はほぼ満席状態だ。

これは紅葉たちが控え室に留まったことが正解だったな。

そんなことを思っていると、開始前のサイレンが鳴った。

「これより第5試合、ニコラ・ベールvs華瀬悠希の試合を開始します」

アナウンスが響く。それと同時に俺は短い単語を呟いた。

「ジエネレート」

もう見せてしまったので出し惜しみする必要も無い。二丁の銃形態の補助武装を呼び出し、術式弾の詰まったスペアマガジンと交換す

る。

「…………おし!!」

最後にガシャツ、と音をたてて入れ替え完了。気合いを入れるために頬を叩き、試合に集中する。

「悠希さん」

しばらくそうしていると、ニコルが呼びかけてきた。その抑揚の無い声が発せられたことに驚き、首を傾げながら彼女を見た。

「本気できてください」

ニコルがそう呟き終えるのと同時に試合開始の合図が響いた。

「始めてください」

それと同時に俺は地面を蹴ってニコルへ接近する。だが、

「——ッ!!」

突如背中に寒気を感じ、勘に従って右に飛ぶ。ブオンツ、という何かを振った音が寸前まで俺が居た場所から発せられた。

ニコルを見る。だが相変わらず動いた気配がない。

（幻術……ってわけでもなさそうだな）

俺の第六感があれば本物ニコルだ、と告げている。その通りだとするならば、あいつが動かずに武器を振り回す方法は一つしかない。

「……こりゃ、ガチでやらんと死ぬな」

苦笑しながら俺は右手の銃口をニコルに向け、それと同時に走る。地面を踏みしめる感触と同時に“何か”が空気を切り裂く音が聞こえる。それを右へ左へ飛んでかわし、両手の引き金を引いた。

ズガガンッ

二発同時に銃弾が飛ぶ。全て先程入れ替えた術式弾だ。

それが同時に弾ける。

右側の術式は巨大な水球を生成するものだ。それをニコルへと放つ。だが、見えない“何か”によって水球は真っ二つに切り裂かれ、ニコル本人に届いたものは無かった。

だがこれでいい。

二つ目の術式を発動する。

瞬間、周りに飛び散った水はニコルの周りに幾つもの水球を作り出す。

先程より幾分小さいが、それを補う数がある。水球の数は約30個。それら全てがニコルへと殺到する。たが。

「まあそつなるよな……」

水球の下から影が伸びる。その影が水球を包み込み、影へと引きずり込んだのだ。正直気色悪い。

そつなるとわかっていたとは言え、さすがに目の前でグロテスクな

光景が広がっては俺の気分も萎えるものだ。

だがいつまでもぼーっとしているわけにはいかない。そう思って再び走り出すと、突如俺の足下の影が蠢きだした。

「あー、もう！！気持ち悪い！！」

女性が使っているまじき魔法に、俺は思わず叫んだ。地面を蹴り空中に飛ぶ。

だが、それと同時に影から手が伸び、俺を引きずり込もうと迫ってくる。

うげ、キモイ。

どんどん距離が縮まってくる俺と影の手。もう魔獣なんかより断然気持ち悪い。

どっかのホラー映画でありそうなシチュエーションに思わず苦笑しながら、今度は普通の銃弾が詰まったスピアマガジン呼び出し、今入れてあるマガジンと交換した。

影との距離、およそ一メートル。こんなことなら刀かなんか呼び出した方がよかったかなー、などと考えながら空中で回転。魔力を込め、引き金を引いた。

【氷属性添加：銃：纏・氷結】

着弾と同時に影が氷る。だが、水球を飲み込んだ影までもが俺に殺到しだした。

形勢逆転とはまさにこのこと。いや、最初から俺の方が不利だったのかもしれない。

迫り来る影全てに銃弾を当て続ける。弾数はギリギリってところか。

数秒後、着地と同時に全ての影を氷付けにした俺は次の攻撃に警戒しながらニコルへと向き直った。

「あぶねーよ、殺す気か」

「あなたはこれぐらいでは死にません」

偉く高い評価を受けてんのな、俺って。

再びの風切り音を聞き、反射的に身を屈める。もう銃じゃまずいかな。

「トレースッ！」

瞬間展開、銃の代わりに刀を。今日何度目かの風切り音を展開した刀で防ぎ、弾く。

そのままニコルへと突っ込み、殺到する影を全て切り裂いていく。

久し振りの高揚感。

影の手をやたらめったら斬りまくっていると、そんなものを自覚した。

楽しい。

俺ってこんなに戦闘狂だっけ？などの疑問も今はどうでもよく感じた。まるでおもちゃを得た子供だな。

きっと俺の顔は狂喜に歪んでいることだろう。

斬る、走る、また斬る。

そうこうしてる内にニコルが間合いに入った。確認するより早く俺の腕は動く。

「うらあああ!!!」

雄叫びをあげながら刀を振り下ろす。もう結界の補助が聞かないほどの威力と速さを備えた一撃。

カキーンッ。

突如金属同士がぶつかり合った時特有の澄んだ音がアリーナに響いた。

俺の刀を黒光りする真つ黒な物が受け止めていたのだ。

それを確認した俺は一旦距離を取り観察する。

ニコルの手に握られたそれは、本人と同じくらいの大きさの巨大な鎌だ。装飾の施されたそれは、禍々しくも心を奪われそうな程美しい。観客も思わず息を飲んでいる。

「ようやく“デスサイズ”のお出ましか。いい加減疲れた」

漆黒の鎌、それはニコルの所持する伝説武器、“死神の鎌”^{デスサイズ}。この“デスサイズ”のみの無系統魔法、それがさつきから見えない攻撃の正体だ。

「無系統魔法“霧の中の首狩り（ミストリッパー）”。鎌自体を魔力で操って、おまけに見えないんだから他の生徒が不思議がるのも無理無い」

伝説武器の名前と所持者の名前は調べれば割と簡単に分かる。だが、無系統魔法については完璧に情報が漏れないようにされている。理由は単純に不利になるから。当然のことながら情報を持っているのと持っていないのではえらい違いだ。得意属性、使用武器、攻撃パターン、などなど持っていれば持っているほど有利になる。それはレア持ちの場合も同じだ。伝説武器の能力まで開示されては他国へ侵略に出る国まで現れるかもしれない。特に今はロシアが控えているのだから尚更だ。

これらの理由によつて無系統魔法、特に伝説武器の能力を知るものはほとんどいない。よつてニコルの能力を知っている者はこの中では俺だけだろう。

そんなことを考えていると、突如今まで動かなかったニコルが走り出した。

——いや。

俺は前方のニコルではなく、何も無い背後に向かって切りかかる。

刀は振り切るより早く止まった。再び金属同士の衝突音が響き、それと同時にニコルが突然現れた。

幻術で自分を作り出し、さらに自分の姿を隠して攻撃。セオリー通りではあるが、ニコル程の高レベルの術師が使うとまるで本物の死神に狙われているようだ。

刀と鎌が交錯する。

何度も何度も切りかかるが、その度に弾かれ、いなされる。

身体はすでに思考で動いていなかった。体調のことなど頭には入らなかった。

ただ自分についてこられるだけの術師に狂った獣のごとく切りかかる。もう止まらない。

楽しい。

その単語が頭を占めていた。これだけの戦いはいつぶりだろう。もう結界の許容量を超えたこれは本物の殺し合いだ。

まだいける。まだ動く。

斬撃の数が増す。斬線の煌めきが俺の視界を覆っていく。それにっられるようにニコルも鎌を振るう。

もっど速く、速く、速くッ！！

「——ッ！！」

だが、変化は起きた。鈍い感触が俺の手に伝わってくる。——刀が折れた。おそらく激しい打ち合いのダメージが補助武装の耐久値を上回ったのだろう。

根元から折れた刀身が宙を舞う。だが、それには目もくれず、俺は迫り来る鎌を見つめていた。

もう、どうなっても知らねー。

「トレース」

俺は新たな武器を呼び出す。一際輝く光が俺を覆った。

episode 24 眠り（前書き）

すみません。

少し忙しかったものでいつもより更新が遅れました。

また目をあけることもあるかもしれませんが、今後ともよろしくおねがいします。

episode 24 眠り

一際輝く光が俺を包む。この感じも久し振りだ。手に集まる光に感動を覚えがら見つめ、ふと目をニコルに向けると、彼女が振るう鎌がゆっくり見える。

……“フアランクス”。

心の中で呟くのと、手に重さが伝わるのはほぼ同時だった。それを強く握り締める。握った何かを振るい迫り来るニコルの鎌を弾く。いつも無表情なニコルの顔が今回は驚きに見開かれた。だが、流石に反応が速い。すぐに距離を開け、こちらの様子を窺ってきた。

「……今のはなんですか？」

試合が始まって初めて開いたニコルの口からは抑揚の無い声が響いてくる。さすがにいつまでも動揺しているわけないか。

驚くのも無理はない。俺の手には何もないのだから。いや、確かに手にちゃんと握ってある、けど本当に何も握っていない。

ここにあつてここに無い剣、それが“幻剣フアランクス”。俺の伝説武器の一つ。

誤解の無いように言うが、見えないのが能力ではない、剣自体に実体がないのだ。

というかそもそもこの剣に能力は無い。不思議なことにこれには伝説武器特有の無系統魔法の類が無い、あるのは普通の伝説武器以上

に術式の保存容量が多いといったところか。
無系統魔法が使えない代わりにほぼ無限に近い数の魔法が使える剣、
伝説武器の中の例外。

周りからは俺が手ぶらでニコルの鎌を弾いたように見えただろう。
事実アリーナ内はざわめきだしている。そんな観客の反応など知っ
たことではなく、俺はニコルに向かって口を開いた。

「やり合ってりゃ分かる」

だが、俺が言ったのは色々と省略しすぎな言葉だった。一々説明す
るのも面倒くさい。これはただ楽しみたいだけという狂った理由で
出しただけなのだから。

そう思った俺は、仕切り直しとばかりに再び地面を蹴った。それに
反応したニコルも素早く俺へと肉薄してくる。

互いの距離が武器の間合いに入ったと同時にそれぞれの武器を振る
った。何度も何度も繰り返される衝突音、完成された芸術のごとき
交錯。

「らあああ!!」

吠えながら俺はありったけの魔力を見えない剣に叩きつけ、術式を
展開。

【無属性魔法：剣技：旋断線・虚空】

そのまま居合い切りの要領で一閃。だが、そこから放たれるのは魔
力の塊。

斬撃と化した魔力がニコルに向かって飛んでいく。だが、それすら

も彼女の鎌が防ぎきった。それがどうにも心地いい。

肉薄しながらも互いの魔力がまるで同胞を見つけたように呼応する。だがまだこんなもんじゃ足りない。

剣撃の嵐、そう呼ぶに相応しいほどの軌跡を描きながら俺たちは剣と鎌を振るい合った。

どれくらいそうしていただろう。5分か、10分か、あるいは一時間か。

半ば無意識で動く身体の中で、俺は少しの乾きを感じだしていた。

先程からニコルの反応が鈍ってきた。いや、俺の速度に追いついてこれなくなってきたのほうか正しいのかもしれない。

秒数が増すごとに俺の斬撃の数も増していく。さらに見えない剣を相手にしているのだから精神的疲労も少くないだろう。

だが、心地よい満足感が薄れてきたのは紛れもない事実だ。

「まだだ、もっと付いて来いニコルッ!!」

叫び、俺の腕は一迅の閃光のように走り、握られた不可視の剣を振り回す。それについてこれなくなってきたニコルは、徐々に撃ち漏らしが出始めた。

剣先がニコルの端正な顔を掠める。そこからうつすら血が滲み出した。

それを確認すると、なぜか乾きがひどくなりだした。

苛立ちを抑えられず、俺はニコルの頭上に向かって無意識に剣を振り下ろす。

だがそこで自分が今しようとしていることを自覚して背筋が凍った。“幻剣フランクス”はゆっくりと、だが確実にニコルの頭へと近づいていく。この距離ではもう防御もままならないだろう。

俺は今本気で剣を振り下ろしている。それはつまり結界の補助を突き抜け、殺そうとしていると言っていることだ。

やめろッ!!

だがもはや止まらない。ニコルの頭を切り裂き、鮮血が飛び散る数瞬先の未来が頭をよぎった。

止まれええええ!!

心の中で叫ぶも口は開かない。自分の身体が乗っ取られた、そんな気がするほど身体が言うことを聞いてくれない。

《はい、ストップ》

頭の中に声響いたと思ったら突如頭を殴られたような衝撃が走った。急に身体力が抜け、握っていた剣の重さも抜け落ちた。視界が暗転し、俺はそのまま暗闇の中に落ちていった。

「ゆうッ!!」

控え室の実況テレビで悠希がいきなり倒れたのを見て、紅葉たちは反射的に場内に向かっていった。

場内では観客がざわついていてるものの、誰も悠希を助けようとする者を居なかった。

そんな観客にふつつと怒りが沸いてきたが、今は怒鳴り散らしている暇は無い。

そんな中、うつ伏せで地面に倒れている悠希の隣にぺたりと座り込んで啞然としているニコルの姿があった。彼女にも何があったのかわからないのようだ。では彼女が気絶させたのではないだろう。

「悠希ッ!!」

真っ先に悠希の下へ走り寄ったのは和彦だった。遅れて全員が到着し、取り囲むように和彦の診断を待った。

しばらくして和彦が顔を上げるが、その顔に焦りを浮かべていた。

「……わからない」

「「「は!?!」」」

全員の声が重なる。それほど全員が驚愕させられたのだ。だが、そんなこととは裏腹に次の和彦の言葉に絶句させられた。

「なんで気を失ったのか全くわからない。体調的にはさつきより良い、寧ろ治つてると言ってもいいくらいなんだ……」
「どういうことだ!？」

拳を握り締め、唇を噛む和彦にライラは混乱しながら尋ねた。

「言葉通りの意味だよ。外傷はまったくくない。脈も呼吸も体温も正常に戻ってるんだ。なのに意識が無い……」

全員が絶句する。だが、そんな中でさつきから座り込んでいるニコラが口を開いた。

「何にしても悠希さんを運びましょう。保健医の教師に見て頂いた方が確実です」

「……そうですね。ニコラさんの言う通りです」

ニコラの発言に綾芽が頷く。悠希を運ぶことに決め、ライラが担ぎ上げてアリーナを出す。未だにざわついている観客を冷たい眼差しで一瞥して紅葉は先に言ったみんなの後を追った。

episode 25 深淵に住まう少女

「…………どこだ、ここ？」

何故か俺は真っ暗な空間の中にポツリと立っていた。どうしてここにいるのか、混乱する頭の中である一つのことばかりがよぎった。

「ッ！ニコル！！」

叫んでも誰も返事を返してくれない。あの後いったいどうなった？俺は確かニコルを――。

「殺していないから心配しなくてもいいよ？」

「――ッ！！」

いきなり女性の声が聞こえてきた。突如目の前が光り出し、弾け散った。まるで武装展開の光を何倍にもしたような明かりに、一瞬目が眩む。

徐々に視力が戻るにつれ、声の主を確認する。

それは不思議雰囲気を纏った少女だった。歳は俺と同じぐらいだろうか、おっとりした笑顔を浮かべながら長い透き通るような黒髪をなびかせている。

「…………だれ？」

こんな訳の分からない状況でも口は素直な疑問を呟いた。だが、反対になぜか少女は驚愕に目を見開いた。

「わからないん？私はいつもあなたと一緒にいるのに……」

驚愕から一転、心底悲しそうな目をする目の前の少女に、何故だかわからないが罪悪感を感じてしまう。

だが、本当にわからない。これは事実だ。それなのに知っているような気もしてならない。自分の気持ちに混乱しながら少女を観察する。

結論から言つと見覚えすら無い。彼女の口振りからすると、ただ一回だけ通り過ぎただけの人というわけでも無いだろう。まだ若干の寂しさを漂わせる表情をしながらも無理に笑顔を作つて俺に微笑みかけてきた。

「まあ仕方ないかな。そのうちわかるようになるから」

そう言つて笑顔を向ける彼女に、心のどこかで何かが引っかかるような感じがした。曖昧な気持ちを引きずりながら、とりあえずこの疑問を置いておく。

「君はここがどこだかわかるか？確か俺は気を失つて……」

「ここ？ここはあなたの心の中。あなたの深層意識の奥深く」

は？今なんて言つた？

首を傾げる少女からとんでもない単語を聞いた気がするが気のせいだろう、きつと。

「えーつと、もう一回言つてくれない？」

「だからここはあなたの心の中」

あはー、なんだか目の前が真っ暗だよ。あ、元から暗いのか。

全く意味が分からないといった面もちで首を傾げる少女。俺の方がわけわからないです。すみません。
混乱のおかげか、面白くもないことを思いながらどうにか平静を装う。

「ま、まあ百歩……いや、一億歩譲ってそういうことにしとく。で、なんで俺はそんなとに来てんだ？なんであんなにそんなとにいらんだ？なんで——」

「落ち着いて」

どうやら言動までは平静とまではいかなかったらしい。口からいくつもの疑問が吐き出されるが、彼女に指摘されて恥ずかしくなる。微笑む彼女は、どこから話したもののか、と言った感じで人差し指を唇につけて可愛らしく考え込んでいる。

やがて考えが纏まったのか、俺に向き直った。

「じゃあ、まずあなたがここに来た理由から。まあ、ここはあなたの中だから少し語弊があるかな？」

おどける彼女に目で促す。だが、

「理由は簡単。私が呼んだから」

「……は？」

間抜けな声を上げたことも、口が開いていることも今は気にならなかった。というより気にしてもらえない程彼女の言葉は驚きだった。だが当の本人は首を傾げて「知らなかったの？」的な目で見てくる。

「どういう——」

「すごい頭痛とか眠気とか無かった？もう動きたくないってぐらい

の

「え……」

身に覚えがありすぎる。何度も倒れ、その都度誰かに迷惑をかけてきたあれだ。

だがなんでそんなことをこいつが知っている？

「だって私がそうしたんだもの」

「——ッ!？」

俺の思考を読みとったような言葉と、その内容に驚愕する。一体こいつは——。

「一体こいつは何なんだ？何処までが本当のことなんだ？って思ってるでしょ」

「——ッ!——!」

また考えていることを読まれた。間違いない、こいつは俺の思考を呼んでいる。俺は鋭くを睨む。だが、

「……フッフ……アハハハハハッ!——!」

突如、信じられないことに彼女は俺の表情を見て狂ったように笑い声をあげだした。

優しい笑顔から一転。陶醉したような彼女に呆然としながらも警戒を解かない。豹変した彼女はなおも笑い続ける。だが、徐々に笑い声も小さくなっていき、彼女は先ほどと同じ笑顔を向けてきた。

「ごめんなさい。あんまり反応が可笑しかったものだから」

可笑しかっただけで年頃の女の子があんな声で笑っちゃだめだろ。若干引きつった笑みを浮かべながら、そんなことを思ってしまった。まだ警戒を解かずにジッと睨み続ける。そんな俺の態度に再び口元を吊り上げて獰猛な笑みを浮かべるが、どうにかこらえたのか、笑顔のまま語りかける。

「なんで考えが読めるのか、だっけ？簡単よ。それはここがあなたの心の中で、こことリンクしている私はあなたの心と繋がってる。だから思考が読める」

「な——ッ——！」

いきなりそんなことを言い出す彼女に今日何度目かの驚きを露わにした表情をする。俺の心にリンクしているだって？ふざけんじゃねーよ。

勝手に自分の心がいじられたような、そんな感慨が胸を打つ。だが一つ引つかかる。

「ちょっと待て。じゃあなんで俺はお前の思考が読めない？」

「そんなのあたしが人間じゃなくて、心を持たないからに決まっているじゃない」

何言っただよこいつ。全然意味わかんねーよ。

もう色んな意味で錯乱してきた俺はキツく彼女を睨む。そんなことをしても向こうを喜ばせるだけだとわかっていてもそうせずにはいられなかった。

予想通り彼女は恍惚とした笑みを浮かべて嬉しそうにしている。歪んでやがる。

「じゃあ何か？お前は俺の中に住む住人で、俺と話があるからあの頭痛を使っただけをこっちに呼んだってのか？」

「住んでるってのはちょっと違う。まあいいけど」

こいつ……。

「ならとつとと用件言つて元のところに帰せよ」

ここで殴りかかっては帰れない、なんてことにもなりかねないため自制する。だが、向こうの反応は期待したのとは真逆の答えだった。

「話しても帰してあげない。と言うよりまだ帰せない」

「何言つて……」

俺が呟くのと少女の顔がいきなり眼前に現れたのはほぼ同時だった。反射的に後ろへ下がろうとするが、何故か体はびくりとも動かない。そんな中彼女の声が辺りに透き通るように響いた。

「あなたは何が欲しい？何を求めて、何を望むの？」

幾分か温度の低い問い。先程と違って目に力強い意志のようなものが映っている。

突然の彼女の変わり具合と意図のわからない問い。彼女は一体何がしたいんだ？

「あなたは何が欲しいの？仲間？金？それとも愛？望めば手に入る。望まなければ永遠に手に入らない」

再びの問い。望み。願い。その単語が頭に繰り返し響いてくる。何故だか心の底から沸き上がってくるもの、それが漏れるように俺の口は動き出す。俺の望み、それは……。

「……力が欲しい。あいつを殺せるだけの力。あいつに屈さないだけの力。そして――」

保健室。

紅葉たちは今日の試合を全て終えてから、ずっとここに入り浸っている。

彼女たちの目の前では苦しそうな表情をしながら一向に目を覚まそうとしない悠希の姿があった。

今は夜七時過ぎ。

もうとつくに生徒がいる時間は過ぎているが、横にいる姉、理事長である波風一葉のおかげで保健室にすることを許可されている。

だがこの場では礼を言う者も居らず、またそれが必要とされる場面でもなかった。

「……紅葉、何個か質問いいか？」

「……なに？」

そんな中、沈黙を破ったのは小学校から腐れ縁のライラだった。だが、その顔にはいつもの人懐っこい笑みは無く、暗い表情でこちらに目を向けずに聞いてきた。

「悠希の最後のあれ……あれは伝説武器だろ？もしかしてあれのせいじゃねーのか？」

「それは……」

肩を震わせながら問うライラに、思わず自分が知る全てのことを話しそうになり、慌てて口をつぐむ。そんな紅葉の態度を見て掴みかかるほどライラは子供ではなかった。

「それは無いわ」

いきなり隣から返事を返された。驚いて振り向くと、そこにはいつものように明るい表情の一葉がライラを見つめていた。そのいつもと変わらない笑みに啞然とする。

「じゃああれは——！！」

「確かにあれは伝説武器よ。けどそれ以上は駄目。これは他人が軽々しく話していいものじゃないの」

怒鳴りかけたライラの言葉を遮って一葉はさつきとは一変、真剣見を帯びた瞳で睨むように彼を見据えていた。

そんな彼女にそれ以上何も言えなくなつたライラは唇を噛み締めて目を逸らしてしまう。

場に再び沈黙が流れる。だが先程よりも空気が重いと感じるのは気のせいではないだろう。それに耐えきれなくなつたようにおずおずと手を上げる綾芽。

「じゃ、じゃあどうして悠希さんは起きないんでしょうか？和彦君や先生が言つたように、異常はどこにもないんでしょう？」

もつともな意見だ。この場にいる全員が同じことを思っているだろう。

あれから色々と調べてみたが、和彦の言つたとおり異常はどこにも見つからなかったらしい。それなのに未だに悠希は目覚めない。まるで意識を閉じ込められたようにずっと眠り続けているのだ。

だが、そこであることがよぎつた。

「姉さん、もしかして“転生継承の儀式”なんじゃ……」

その疑問にニコラと一葉、それと桜以外が一斉に首を傾げる。この単語は一部の人間しか知られていないことなのだから無理も無いだろう。

「えっと――」

「それはありません」

苦笑いしながら答えようとする一葉を遮ってニコラが口を開いた。それにやや驚いたが、本人は相変わらずの無表情で続けた。

「悠希さんは“血液系”です。それに“転生継承の儀式”で長時間の眠りについた事例は今までにありません」

簡潔に言い切ったニコラに、概ね同意見といった様子で頷く一葉。そのやりとりを意味分からず聞いていたであろう他の三人の内、しびれを切らした和彦が口を開いた。

「えっと、その転生継承の儀式？それっていったい……」

おずおずと言った様子で聞いてくる彼の疑問を全員持っているのだろう。全員が聞く体勢に入っている。

一葉は「一応これも機密事項だけどね」と前置きしながら苦笑いしている。

「みんなは伝説武器ってどうやって所有者の下に行くか知ってる？」
「え？えっと、適合者が見つかり次第、国際委員会の使者から直々に譲渡される、ですよね？」

何を今更、といった風に答える和彦。

そう、伝説武器はその特殊性のため取引での受け渡しができない。だがそれでも手に入れようとするものもいるために世界各国の伝説武器は一度『国際委員会』に保管され、適合者が見つければ渡すといったシステムがとられている。

それは常識となっていていることであり、この場で知らない者はいないと言っていていいだろう。

だが、それは大きな誤りなのだ。

「表向きはそうです。けど本当は違います」

それに答えたのは桜だった。含みのある言葉にライラ、綾芽、和彦が首を傾げる。

「結論から言うとな国際委員会にはそんな仕事は無いわ。ううん、そもそもそのシステムすら存在しないのよ」

「「「えっ!?!」」」

桜から引き継いだ一葉の言葉に全員の驚愕が重なる。まあこの話をされて驚かない人の方がどうかしているだろう。だが、そんなことなど無視して一葉は続ける。

「伝説武器は適合者しか使えないっていうのは知ってるわね? もつと言うと伝説武器は適合者が触れる、もしくは魔力を流し続けてないと具現化さえできない。つまり所持者のある程度近くに無いと具現化できないというわけ」

「え!?! じ、じゃあ——」

恐らく続きは「どうやって保持者たちは伝説武器を手に入れたのか？」といったものだろう。だろうというのは一葉がその続きを遮ったからだ。

「保持者たちが伝説武器を手に入れられた理由は簡単よ。武器そのものが適合者の下に現れるから」

「へ？」

驚愕に絶句した和彦と綾芽。そんな中でも素っ頓狂な声をあげたライラに失笑してしまう紅葉。だが、それにも気にした様子を見せず、一葉が再び話を続ける。

「けど無償で現れるわけじゃないの。適合者は対価を払わなければならぬ。それも強制的に」

「い、一体何を……？」

もう聞きたくない、けど聞かなければならない。そんな複雑な表情を浮かべながら和彦は尋ねる。

だが、今度は少しの間を置いて明るかった表情を少し暗くさせてから口を開いた。それに全員が息を飲む。

「……大きく分けて3つ。一つ目は“細胞系”。これは身体の一部を代償にするパターン。二つ目は“痛覚系”。全身の痛覚が刺激されたような痛みを代償を払うパターン。そして最後が“血液系”。全身の血管から血液が噴き出されることを代償にするパターン。適合者は各個人の性質によってこの三つの内の一つに当てはまるの。で、それらが起こって武器が具現化するまでを“転生継承の儀式”というの」

全員が沈黙。何度聞いても背筋が凍える程の辛さ。それが伝説武器、

最強の兵器の実態である。知らないライラたちは全員が顔を青くさせている。

「で、でもそれって——!!」

「ええ、死ぬ可能性もあるわね。特に“血液系”の場合は血液不足が確定のようなものだから一番危険が高いの」

それがここで寝ている少年の一つの顔。力を手にしようとして何度も死にかけた男。

そんな感慨にふけっていると、再び一葉が話し始める。

「けどね、それでもこの子が負った心の傷に比べれば些細なことなの」

そう言う一葉の顔にはどこか影があった。紅葉は悠希の過去については何も知らない。知っているのは一部の秘密だけなのだ。だがこの一葉だけは知っているのだ、悠希にかつて何があったのかを。

そう思うと心がチクリと痛んだ。そんな感傷を振り払い、一葉の言葉を一字一句聞き逃さないように耳を傾けた。

「それは私の口からでは言えない。それにこれを私が言うのもあれだけど……」

言葉を区切り、再びいつものような笑顔を向ける。

「……悠希のこと、これからも支えてあげてね」

そう言って頭を下げた一葉を見て。全員の気持ちを代表してライラが口を開いた。

「へっ、何を今更そんなこと言ってるんですか。そんなの言われなくてもわかってますよ」

照れくさそうなライラの言葉に全員が力強く頷く。紅葉は一つ、一葉に「心配いらないよ」とだけ声をかけ、それからこの暗い話は終わりとなった。

それから夜8時を回ってから明日の試合に備えて早く寝なさいと言う一葉の意向で全員寮へ戻ることとなった。

悠希のためにも絶対トーナメントを勝ち抜いて見せる。満点の星空を見ながら強く心に焼き付けた紅葉だった。

「……そう」

俺の言葉に満足したように頷く彼女に、ますます意味が分からなくなる。

ここはこの少女が言う俺の心の中。周りは暗いのに何故か彼女の姿ははっきり見える。きっと向こうからも同じようなものなのだろう。そんなどうでもいいことに自分の中で確認すると、計ったようなタイミング（実際に俺の心を読んでいるのだろう）で話を続けた。

「じゃああなたにチャンスをあげる。手に入れるも手に入れないもあなた次第よ」

「……は？」

いきなりそんなことを言われて、つい間拔けな声を出してしまった。そんなことなど気にするつもりも無いのか、彼女はおもむろに右手を上げる。

パチン。

彼女が指を鳴らすと同時に彼女の姿がかき消えた。驚いて左右を見渡すが誰もいない。しかし、

「はッ!？」

いきなり地面が消えたような感覚がしたかと思と、突然浮遊感が身

を包んだ。消えたよう、ではない。本当に消えたのだ。
必死に手を伸ばすも何かに触れる気配すらない。

「なんだってんだよッ!!」

いきなり自分で自分でもびっくりするほど大きな声で怒鳴ってしまふ。だがこの状況で大声を出したとこれで何も変わらないだろうことは俺にだってわかる。とりあえず現状の確認を急ぐことにする。

現在、猛スピードで落下中。手を伸ばすも何かにふれる気配は無い。

結論。

心の中にも重力なんてのがあるんだな！。

そんなバカなことを思いながらも俺は右手に集中する。

「ジェネレート」

このまま落ちて下に激突しても大丈夫なような気もするが、念には念を入れて補助武装を展開――

「……あれ？」

いくら待っても光が現れない。もう一度呼んでもやはり変化はおこらなかった。

「うつそー……」

そんな中でも勿論落下が止まっていることなんてないわけで、今現在もかなりのスピードで急降下中。冷や汗が止まらない。
どうしたものかと思案するも、打開策が全く思いつかない。いつそ

呪文詠唱してでも魔法を使うか？

補足しておくが、別に魔法は補助武装無しでも使えないわけではない。ただ、魔力の配分が難しいやら、呪文が長いやらでほとんど使う者もない。そんな苦肉の策があるのだが、なんか下につくまで時間が無いような気がするんですけど……。

俺の予感は見事的中（まあ、当たっても結果が変わるわけではないのだが）。周りは未だに暗闇に包まれているが、俺の頭上——というより（逆さまなので）地面らしきものが何故か光を反射しているのが見える。

いや、あれは……。

「……水？」

よく見ると少し波がたっているようだ。まあ普通に考えて地面から水に変わったところで死ぬのは変わらないだろう。

そう思うと自然と恐怖心にかきたてられるもので、さっきから顔が徐々に青くなっているのがわかる。何が言いたいかと言うと、

「いいいやああだあああああ——！」

情けない程の絶叫を上げながらも落ちていく。つまりいくら今までに危険なことをしてきたからって痛いのは嫌なのだ。それが死ぬほどだとすれば尚更。

そんな必死の訴えでまさか重力に逆らえるはずもなく、俺と水面の距離はものすごい速さで縮まっていき、そして——

ドッパアアン！！

俺は真っ逆さまに水面に激突した。

「ハアアアアッ！！」

紅葉が両手に持った刀が一閃し、相手の腹部に食らいつく。衝撃吸収の結果も完全ではない。相手が死なない程度にダメージを軽減させるだけなのだ。そのため胴体が真っ二つになるわけではない。痛みと衝撃がある程度通るだけなのだが、当然気絶させるには充分すぎる。

防ぐこともできずに横腹に強烈な一撃を決められた対戦相手はそのまま地面に倒れ込んだ。

「勝者！！波風紅葉ッ！！」

今日最後の自らの勝利に多少安堵しながらも、心は保健室で未だに意識を失っている悠希のことが大半を占めていた。

これで紅葉の学年順位は20位台に乗ったことになる。今のところ勝ち進んでいるのはライラとニコラの二人だけ。綾芽は負けてしまい、順位は64位となってしまったが、本人曰わく「今までよ

り500位以上上がっている」とのこと。悠希の特訓がちゃんと身についていたらしい。

明日からは20位以上を決めるトーナメント。気を抜いていたつもりは無いが、更に気を引き締めていかなければ足下を掬われるだろう。

控え室から荷物を取り、アリーナを出ると既にライラたちが微笑みを浮かべながら待っていた。小走りで駆け寄ると、自然に笑みがこぼれてしまう。

「明日からいよいよ本番ですねっ！！私の分まで頑張ってください！！」

「おいおい、今までがウォーミングアップみたいな言い方だな……」

ライラの的確なツツコミなど気にした様子も無く、激励を送ってくる綾芽。そんな彼女の態度に唇を尖らせて拗ねてはいるが、ライラも満更では無さそうだ。

「しかし、俺が20位にくるとはな。夢にも思わなかったぜ」

「何言ってるのよ。あんたは実力があるのに集中できてないから順位が低かったのよ」

そんな謙遜を言うライラに今度は紅葉がツツコむ。

実際ライラの実力は第11高校でも屈指の物だ。にも関わらず、今まで目立った成績を残せていないのは、

「……あがり症なのもわかるけどさ。………勿体無いよね」

「なッ——!!」

呆れた風に紅葉が言うと、真っ赤になって抗議しだすライラ。そう、ライラは極度のあがり症なのだ。試合になると緊張しすぎてほとんど動けなくなってしまう。

それが何故今日に限ってこうなのかと言うと、やはり悠希の存在が大きいのだろう。

未だに意識が戻らない友人のことを考えすぎるあまり、別のことは考えられない。ゆえに今日は試合に集中できていると言っわけだ。しばらくそのネタでいじっていると、ふとあることに気がついた。

「そういえばニコラさんは？」

彼女の姿が見当たらない。少し気になったので聞いてみたのだが、何故か全員辺りを見回している。

「あれ？さっきまでいたはずなんだけどね……」

「お姉ちゃんの試合は一緒に見てたよ？」

男の子にしては低い身長で女の子みたいな顔立ちの和彦が可愛らしい仕草で首を傾げ、我が妹ながらも美少女と呼ぶべき桜も首を傾げると、男なら誰しも喜びそうな雰囲気を醸し出していた。

しかし、ここにいる和彦以外の男はライラしかいないのだが、ライラは小学校のときから桜を知っているし、和彦のことを友人と認識しているせいなのか、全く反応を見せない。

まあそんなことはどうでもいいが、少しニコラが心配になってきた。

ヴー、ヴー。

そんなとき、ポケットに入れておいたケータイが鳴った（鳴ったと言っても、マナーモードになっているためバイブレーションが鳴ったという意味）。

確認すると、ディスプレイには『mail』の文字。

疲れましたので今日は先に戻ります。

お疲れさまでした。

ニコラ・ベール

簡素な文を読み上げ、ケータイを再びポケットに収めて、メールの内容を話す。

「そうですか。いくらニコラさんでも疲れは溜まりますよね」

「もしかして無理させちゃったかな？……」

「だな。あのでっかい鎌も伝説武器って言ってたし」

綾芽の発言に全員が難しそうな顔になる。ニコラへの罪悪感を抱いたのか、場の空気が重くなる。

「……そろそろ帰ろっか。今考えても仕方無いわよ」

結局そこにたどり着き、紅葉の提案に今度は全員が頷く。そこで桜

が思い出したように声を上げた。

「あっ！今日お兄ちゃんのお見舞い行っていないよ！！！」

「……あ……」

ごめんゆう。忘れてた。

慌てて紅葉たちは悠希の眠る保健室へと向かった。

暗闇の中。何かに包まれているような感覚が肌に伝わり、恐る恐る目を開く。

「……生きて、る？」

疑問系ながらも自らの声が発せられたことに多少の安堵を抱きつつも、辺りを見回す。首を動かす度に抵抗がかかり、酷く疲れる。どうやら俺は今水中（心の中らしいのでその表現が的確かわからないが）にいるようだ。それにも関わらず息は出来るらしい。

一体あの女は俺に何をさせるつもりだ？

浮かんでくるこの疑問が一番大事なように感じられ、さっきまでの思考を切り替える。

なんか願いとかが聞かれたけどそれが関係しているのだろうか？
仮にそうだとしてもどうやって叶えるつもりだ？俺の願いを叶えてあの女にはなんのメリットがある？

まさか女神様がぐーたらな小市民である俺にぐーたらしている褒美をくれるってわけでも無いだろう。というかそんなことされても混乱するのが普通だ。

落ち着け俺。あの女が言っていたことにヒントがあるはずだ。

「むー……」

.....。

スミマセンお手上げです。どうやら俺の頭は俺の思った以上に悪いらしい。

約二分ぐらい黙考していたというのにヒントの欠片も、閃きも何も思いつかないとは……。一体どれだけ使わなければこんなアホな脳みそになれるんだろう。

自分で自分を貶してはずんずん気分が沈んでいく。もうお通夜並のテンションに落ち込んだ俺。

そんな俺の目の前が突如光り出した。

「？なんだ？」

悲しいかな、もうこういうことに慣れた俺は「またなんかめんどくさいことか」などと予測して苦笑いしていた。

だが、それも現れた人物を確認した時点で、心臓が止まったような感覚に襲われ、目を見開いた。

現れた人物は男。

少し長めの黒髪に、身長は今の俺よりも少し高いぐらい。切れ長の目の整った顔立ち。その人物は黒く輝く刀を持っていた。

「な、なんで——」

一体なんの冗談だ……。

「どう、して——」

何故、なんでこの人が目の前に立っている……。

「兄……さん……？」

見覚えあるなんて者じゃない。愛刀の伝説武器、闇刀“影月”を携えた俺が知る中で最強の剣士。後に“影月”が俺の下へやってきて尚、この人のように扱いこなせなかった。そんな俺の憧れが——華^は瀬雅^な人^まが。

「なんでここに出てくんだよッ！！兄さん！！！！」

兄さんは答えない。ただ、俺に向けた刃が鈍く光るった。

伝説武器、闇刀“影月”。

現保持者『華瀬悠希』。

元保持者『華瀬雅人』。

夜色の吸い込まれるような刀身を持つ伝説武器。

元保持者『華瀬雅人』の死亡後、現保持者『華瀬悠希』へ再適合した。

これが国際バンクに登録されている情報だ。

伝説武器は保持者が触れる、または魔力を流し続けなければ使用はおろか、具現化さえできない。

そのため俺の兄——華瀬雅人の死亡後、具現化仕切れずに欠片も残さずに消えた。

——はずだった。

それから丁度一週間後、影月が俺を選ぶまでは。

適合者の移動、これは有り得ないわけではない。

保持者が伝説武器の所有権を放棄——つまり保持者が死ねば次の適合者が現れれば再適合することができる。

だが通常、再適合にはそれなりの月日を要する。伝説武器は保持者の精神面、肉体面で自身に相応しいものを選ぶのだから、そのような人物が一週間そこらで見つかる筈がない。

一般的に再適合者が見つかるのは五年後〜十五年後の間。それが肉親だろうと変わる筈がない。

にもかかわらず“影月”は一週間後に兄さんの実の弟である俺を適合者として選んだ。

これには何か意図があるのか？

それが今まで抱いてきた素直な疑問だ。

もしかしたら兄さんが俺に託した、そんな希望を抱いたこともあった。

そんなこと、恨んでいる筈の兄さんがするはずがないのに。

「はい、あなたの相手はあなたのお兄さんです」
そんな呑気な声と共に現れた先程の少女。

「何言つて——!!」
「ここじゃあれだし場所変えましょうか」

状況に思考がついていけず、問いただすように怒鳴るも最後まで言い終わるより早く、彼女が再び指を鳴らした。突如周りの色が変わる。

「うそ、だろ……」

視界に飛び込んできたのは古びた工場のような景色。それだけなら普通の廃工場か何かだと思っただろう。だが、明らかにここは普通ではなかった。

辺りを塗り替えるように所々染まる紅——血痕。さらに転がる無数の死体。

その場にいるだけで吐き気を催すような光景。だが、俺はここを知っている。いや、この光景の渦中にいた。

ここは俺の罪が染み付いた場所であり、俺の人生を180度帰る出来事が起こった場所。

驚愕に目を見開いていると、再びこの場所には相応しくない少女の呑気な声が響いた。

「ルールは簡単。どちらかが死ねばそれで終了。ユウキもここが現実じゃないからって手抜きしてやられてたら本当に死ぬわよ？」

いきなりの兄弟同士での殺し合い宣言。それに真っ先に反応したのは他の誰でもなく俺だった。

「待てよ！！そんなのできるはずねーだろッ！！」

「やらなきゃ死ぬだけよ」

悪びれもなくそう言う彼女にますます俺の怒りが膨れ上がる。

「お前、ここは俺の心の中だとか言ってたじゃねーかッ！！いい加減に——」

「それがここでは本当に死ぬかもしれないのよ」

再び俺の言葉を遮った彼女の言葉に、俺の思考がフリーズした。そんな俺の心情を知ってか知らずか、彼女が畳みかけるように言う。

「催眠術って知ってる？人間は『腕が火傷している』っていう催眠をかけると本当に火膨れができたっていうあれと一緒に。つまりこ

ここで起こったことは現実でも起こるってわけ」

啞然とした。彼女の言葉が本当であると過程すると、自分が無事に帰りたいのであれば夢のような存在とは言え、兄さんを斬らなければならぬ。それを拒めば確実に死ぬ。その究極の二択に俺はすぐに答えを出せなかった。

「あ、ちなみに伝説武器だけ、展開できるようにしといたから」

最後にそう言った瞬間、彼女は再び姿を消した。

後に残されたのは俺と兄さんの二人。苦しくも場所は兄さんが生きていた最後。

その事実が俺の鼓動を速め、呼吸を荒げていく。

今すぐにも逃げ出したい。

グルグル回る思考の中、ふいに沈黙を守っていたはずの兄さんが口を開いた。

「懐かしいな。ここで俺は死んだ。お前が命令を無視してロシア軍に捕まったせいだな」

力強く響く兄さんの声。だが、響くのは声では無く、兄さんの言葉の意味だった。

頭を金属バットで殴られたような衝撃と、激しい嘔吐感にみまわれる。こっちに来る前まで感じていたものとは比べものにならない濃いものだ。だが、もちろん気を失うことも吐くことも出来ない。

「お前が俺の足を引っ張ったんだよ」

「ごめん、なさい……」

「お前が自分の身を守れば」

「ごめんなさい……」

「お前さえいなければ……俺は死ななかったッ!!」

ただ謝ることしかできない俺に、突如兄さんは声を荒げ、殺気が膨れ上がる。それに呼応するかのように“影月”の輝きが増していく。それはまさに月のような、と表現しても過言ではないほど美しく、それに対して俺の目にはただ恐ろしく映った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4280x/>

犯罪者は英雄？

2011年11月10日01時06分発行